



Title	隠喩論Ⅴ：ブルーメンベルク『世界の読解可能性』における絶対的隠喩
Author(s)	高橋, 吉文; Takahashi, Yoshifumi
Description	特集: 隠喩 = Metapher (Metaphor)
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 58, 57-122
Issue Date	2010-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43196
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC58-005.pdf



隠喩論Ⅴ：ブルーメンベルク 『世界の読解可能性』における絶対的隠喩

高橋吉文

要約

隠喩と変態との関係をドイツの思想家ブルーメンベルク等の隠喩観を対象として論じた『隠喩論Ⅲ』と、ブルーメンベルクの思考の表舞台となっている基底隠喩間の（すなわち著作間の）配列に秘められていた「V字プロセス」（高橋）構想を明らかにした『隠喩論Ⅳ』を承けて、本論考『隠喩論Ⅴ』では、ブルーメンベルクが概念体系の最終的根拠として設定した「絶対的隠喩」の実態を、『世界の読解可能性』において考察する。

そこにおいて絶対的隠喩として明示される回数はわずかしかないが、それらが絶対的隠喩とされ、他のケースが隠喩や隠喩態、修辞と表現される基準の曖昧さ、絶対的隠喩の恣意性等、絶対的隠喩概念の不可解な非一貫性が確認される。しかし、それに続いてなされる絶対的隠喩言及箇所具体的な分析から、著作全体の底にブルーメンベルクが設定した全体構想の描きだす思考の母型回路（「V字プロセス」）と、非-人間的「洞察」Einsichtenを志向するその著作の最終的目的、そしてブルーメンベルクによる絶対的隠喩の不可解な投入に隠されている「西洋文学の象徴体系」（高橋）に即した暗号的機能が明らかにされる。

目次

- 1 ブルーメンベルクの隠喩学方法
- 2 絶対的隠喩の非一貫性
- 3 『世界の読解可能性』における絶対的隠喩
- 4 著作の転換点第11章——バークリの絶対的隠喩 触覚
- 5 美の乖離世界がはじまる
- 6 空転する書物隠喩——読解の空白化への歩み
- 7 『世界の読解可能性』におけるV字構成と、絶対的隠喩の暗号性

1 ブルーメンベルクの隠喩学方法

本隠喩論Ⅴは、すでに発表された筆者高橋のⅠ－Ⅳまでの計4本の隠喩考察、特にⅢ、Ⅳのブルーメンベルクの隠喩についての考察をふまえた上で、その著作『世界の読解可能性』に拠って、ブルーメンベルク隠喩学の中心概念である絶対的隠喩の奇妙な曖昧さに隠された意味を論じようとするものである¹。

隠喩論Ⅰは、隠喩の基礎的・初歩的次元から話を起こし、本義／転義 *Übertragung* のねじれた関係と、ずれるものが有する秘儀的意味を明らかにした。

隠喩論Ⅱは、隠喩とあれこれ対応するところの多いメルヘンの語りの技法を手がかりとして、隠喩成立のための基本的5条件、ずれ、反復と変換、身体性、冥府行、呪いの清祓を、[隠喩の秘法5番]として抽出した。

隠喩論Ⅲは、隠喩の支配を絶対化する現代思考の双璧ともいえる二人、アメリカの認知科学者のレイコフ(隠喩による写像)と、ドイツの思想家ブルーメンベルク(絶対的隠喩)とを比較し、二人をニーチェの基本図式「アポロ・ディオニュソスからくり」(高橋)に基づいて位置づけ、変態と隠喩の関係を明らかにした。

隠喩論Ⅳは、ブルーメンベルクの絶対的隠喩及び基底隠喩配列(高橋)を検討し、基底隠喩配列のうちに隠されている青写真、古代からの人類の思考マトリックス(母型回路)である死と復活による冥府巡り「V字プロセス」(高橋)の存在を明らかにした。

異常なまでに該博なる知識を有し、古今の夥しい数の思想家や芸術家たちの思考の襞に自在かつ複雑に、執拗にはいりこむ異能、そしてそれら全体をつなげ束ねていく構想の大きさにおいて、ほとんど怪物的なといっても過言ではない極めて独創的な現代ドイツの思想家、ハンス・ブルーメンベルク Hans Blumenberg (1920-1996) は、北ドイツの港町リューベックにユダヤ系の家庭に生をうけ、大戦中ユダヤ人として収容所に送られるが、幸いそこから逃れて生きのびる。その後、中世スコラ学に関する博士論文、フッサール現象学に関する教授資格申請論文

1 隠喩論Ⅰ：『隠喩の本義／転義からくり』、『ノルデン』第33号、ノルデン刊行会、札幌、1996、pp.187-221。
『隠喩論Ⅱ：身体性ダンジョンからの帰還』、高橋吉文編『隠喩のポテンシャル』、言語文化部研究報告叢書39、北海道大学、2000、pp.211-250。
『隠喩論Ⅲ：隠喩と変態——レイコフとブルーメンベルクの隠喩論』、佐藤拓夫編『遍在するメタファー——その原理と展開』、国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書60、北海道大学2005、pp.119-142。
『隠喩論Ⅳ：ブルーメンベルクの基底隠喩配列』、高橋吉文編『隠喩とメタ思考』
日本独文学会研究叢書037号、日本独文学会、東洋出版印刷株式会社、東京、2005年10月、pp.49-70。

を皮切りに、『近代の正統性』（1966）、『コペルニクス的宇宙の生成』（1975）等の大著を発表、ドイツのギーゼン、ボーフム、ミュンスター大学等で教鞭をとり、1996年に世を去っている。

『神話づくり』『世界の読解可能性』『生活時間と世界時間』『洞窟からの出口』等の大著がある。フッサール、ハイデッガー、フロイト、ベンヤミン、カッシーラー等の影響を受けたその思想は、いわゆる隠喩（メタファー Metapher）によって西洋の思想体系の歴史を読みかえそうとする隠喩学 Metaphorologie を構想し実践するもので、ベンヤミンにも匹敵する思考と文体の極度の難解さにもかかわらず、人々のブルーメンベルクに対する関心はその死後も衰えることがない。

小人は、いつどこでもわたしを出し抜いた。出し抜いてじゃまをした。けれどもそのほかには、かれ、この気味の悪い代官は、わたしには何もしなかった。わたしが手に入れたもののすべてから、忘却という半分を取り立てること以外には。（『一九〇〇年前後のベルリンにおける幼年時代』（1932-38年頃、『ヴァルター・ベンヤミン著作集12』小寺昭次郎編訳、晶文社、1971、pp.112-113）²

ベンヤミン（1892-1940）は、『歴史哲学テーゼ』のⅠ（今村仁司『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』岩波現代文庫、岩波書店、2000、p.53）や『一九〇〇年前後のベルリンにおける幼年時代』の末尾において、排除され忘れられていった様々の隠れた力や異なる可能性を、ドイツ民謡「せむしのこびと」のこびとのまなざしとして語ったが（アルニム、ブレンターノ編『少年の魔法の角笛』1806-1808。ブレンターノ、アルニム『少年の魔法のつのおえ——ドイツのわらべうた』矢川澄子、池田香代子訳、岩波少年文庫049、岩波書店、2000はその部分的邦訳である。pp.88-91）³、内容的にも方法論的にも、そして文体としてもそのベンヤミンの衣鉢を継ぐかにみえる思想家ブルーメンベルクもまた、1981年に刊行した『世界の読解可能性』の序言「本書について」の中で、隠喩学とは、科学や思索等の「成果のすべての奥底に沈殿し」忘却されている「願望や要求の痕跡を見つけ出そうとする作業である。」（邦訳 p.iv）と宣言している。

成就されなかった期待、これからもたぶん成就されることのない期待も、歴史的事実であり、歴史の要因である。それは、たえずわき上がる幻惑や誘惑、そしてついには「すべてを手に入れたい（Vogliamo tutto）」という妄想への端緒である。充実した世界経験に対する魂の奥底にあるこのような満たされぬ思いこそが、秘教的な導師、語りえぬ世界に導

2 Walter Benjamin, Gesammelte Schriften, Band VII-1, hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Schorlem, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 937, 1989, S.429f.

3 Des Knaben Wunderhorn: alte deutsche Lieder, gesammelt von L. Achim von Arnim und Clemens Brentano, Dritter Band, Heidelberg bey Mohr und Zimmer, 1808, S.296f.

こうとする誘惑、隠喩的な意味をも含む最も広い意味での空中浮遊の修行者を生み出してきた。そういった痕跡をたどって行くと、願望が生まれて根づいた場所に行き着き、そこからそれぞれの伝統にくるまれてどのように変形されてきたのかを知ることができる。かつてすべての真理を含んでいると期待させた書物があつたが、真理所有のこのような基本形式は今なおほとんど放棄しえないものである。他の諸形式では、「無限の（書き換え）作業 Arbeit」の後に、という留保が付帯してくるともなれば、これはいたしかたない。（『世界の読解可能性』山本尤、伊藤秀一訳、叢書・ユニベルシタス831、法政大学出版局、2005、p.iv. Hans Blumenberg, Die Lesbarkeit der Welt, suhrkamp taschenbuch wissenschaft592, 1986, S. 1f. 同文庫は本論では以後 stw と略記する。下線、独語補足、括弧内補足は高橋。難解なこの書物からの翻訳引用は上記邦訳を基本とし、それに適宜、時には大幅に筆者高橋が修正を加えている。以下同様。）

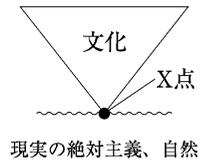
人間の思考の博物誌家とでもいうべき、広範な分野への溢れんばかりの好奇心と、精神の鬱蒼たる密林の奥に大胆に、そして鋭く分け入りゆく魔的なまでの潜入力とを併有するブルーメンベルクが見出そうとしていたのは、人びとの思索や思想の体系がどこから、どのようにして発生し、どのようにして持続されていくかであった。ブルーメンベルクにとっていわゆる西洋の思想とは——東洋のそれについてブルーメンベルクが表だって問うことはない——、その始まりや要の部分論理的であることはありえず、逆に、ある曖昧な何かにすがって立ち上げられ、そのあやしげな何かにこそおぼさって存立しうるひどく危ういものだからである。思想がそれ自体として自律しうるなどということは、まずもってありえないのである。もちろん、それぞれの時代や社会の表舞台において繰り広げられることになるのは、論理的構築物として標榜されるその思想すなわち概念体系の方であるとしても、それらをも含む文化という人間活動の総体は、暴力的な大自然、偶然の入り乱れる生態系の大海原の上に、あるあやしげな一点X点を設定し、その針の先にいわば逆三角形に倒立してはかろうじてバランスをとっているにも似た、ずいぶんと危うい空中楼閣にすぎないのである⁴（図1）。

4 宇宙や生態系内における文化の偶然性、危うさについては以下の書物を参照のこと。
 松井孝典『松井教授の東大駒場講義録——地球、生命、文明の普遍性を宇宙に探る』（集英社新書、2005、集英社）
 スティーヴン・ジェイ・グールド『ダーウィン以来：進化論への招待』ハヤカワ文庫、早川書房2001。
 同『フラミンゴの微笑——進化論の現在——上・下』同上、2002）。
 梅原猛・伊東俊太郎・安田喜憲総編集「講座 文明と環境」（朝倉書店、1995他）のシリーズ
 文化については、
 ヴァルター・ブルケルト『ギリシャ神話と儀礼』橋本隆夫訳、Libro、1985、「文化が基本的には、最も新しい時期に発明された、言語表現された言葉を中心にした一つの複合的な記号体系であるとするならば、」（pp. 71-72）。
 ピーター・パーク『文化史とは何か 増補改訂版』長谷川貴彦訳、法政大学出版局、2010

図2 見解と洞察（高橋による想定図）



図1 文化と自然



その思想体系は、晴れて論理的体系として結晶化するや、奇妙なことに、あるいは当然のこと、みずからのその曖昧な出自、すなわちその生成をあやしく幫助してくれた救済者でもある非論理的なるもの、ベンヤミンが醜い「せむしのこびと」と呼んだあの曖昧な力を極力忘れさろうとする。そのような屈折した関係をブルーメンベルクは、『世界の読解可能性』（1981）の序文において、洞察と見解との関係として定式化し、概念体系の論理的な洞察のみを本質的とみなす伝統や基本的思考風潮に対して、隠喩による見解の重要性を提議した（図2）。

それでもまだ本質的なものが問題なのだろうか。反発されるのを承知の上で、本質的なものも「誰のために」と問い直されねばなるまい。というのは、われわれの洞察 (*Einsichten*) だけが、そのまま本質的なものであり続けうるかもしれぬゆえに本質的なのではなく、われわれの見解 (*Ansichten*) もまた、たとえ（それが機能した後にも表向きとしては）本質的なものであり続／けることはないのかもしれないとしても、（やはり）本質的であることには変わりはないからである。人間は洞察する存在なのだろうし、やがてそうなるかもしれないが、少なくともそれと同程度に見解を持つ存在でもある。（それどころか、）人間は一つの世界を持つ、あるいは自分に一つの世界を与えてしまうと、（実際はそれでしかない）「世界に対する見解」だけに満足してしまい、(①見解では十分ではないとする懐疑や批判がなされた場合、礎となる見解を否認したことによって、当然のこと目指す洞察の入手は

ブルーメンベルクの文化概念は、「知識、信仰、技芸、道徳、法、慣習、社会の構成員として人間が獲得したその他の能力や習癖を含む複雑な全体」（パーク『文化史とは何か』p.45）とするタイラー（『原始文化』）等の文化人類学的な文化定義の延長線上にある。cf. E. B. Tylor, *Primitive culture*, part1. The origins of culture, Harper torchbooks; TB33, Harper, 1958, p.1.

但し、その「複雑な全体」の下半分は、ブルーメンベルクでは薄明にひたされた不可視の隠喩的領域である。そして、その薄明が身体として自然の中に融けこんでいるとするならば、もちろん自然と文化との界面は実際には複雑に入り組んだものとなる。

そのブルーメンベルクの文化観については、

Hans Blumenberg, *Arbeit am Mythos*, Suhrkamp Verlag, 1996, S.15ff.

Jüng Haefliger, *Imaginationssysteme. Erkenntnistheoretische, anthropologische und mentalitäts-historische Aspekte der Metaphorologie Hans Blumenbergs*. Peter Lang, 1996, S.73ff.

むりであるが、しかしまた②見解を礎としていくべきであるとして、見解に対する) 懐疑がなされない場合であっても、(見解の先にあるかもしれない)「世界の洞察」を得る見込みは、人にはない。(それゆえ、)メタファーの研究は、(その最も重要な)見解に正当な権利を与えさせるために、(目下ありもしない洞察の擬似形態であるいわゆる(擬似的)洞察に入ることを控え、)洞察の手前で立ち止まるのである。(『世界の読解可能性』、p.vi-vii、stw, S.3. 傍点すなわち強調は原文、括弧内の独語補足は邦訳本による。その他の括弧内のおびただしい補足、下線、改頁の印／は筆者高橋による。)

ブルーメンベルクでは、人は、論理的で客観的な認識(洞察 Einsichten)と、非論理的でなかば主観的な認識(見解 Ansichten)との二種類の認識をもつとされる。そこにおいて基本となり、無条件的に先行するという意味でほとんどアプリアリ的に先在するのは、後者の非論理的な認識(見解)の方である。それは、生きのびるために発明され活用される自在な武器である隠喩によって創りだされる。多くの隠喩が絡みあいその末に複雑に醸成されていった具体的な「生活世界」Lebenswelt⁵(「自然な日常的経験において生きられる世界」、木田元『現象学』岩波新書、1973、p.55)から湧きあがるその見解がなくては、私たち人類はそもそも生きていくことさえできないのである。そして、前者の論理的認識(洞察)、概念体系なるものもまた、隠喩が織りなすその「生活世界」のうえに立って初めて美しく理性的に構築されうることになる。非論理的な隠喩(メタファー)こそが、ロゴス(論理)による概念体系を実質上存立させているものなのである。それゆえ、「生活世界」の中で、私たちがいつしか獲得し、また意識もせずにもちいている多くの隠喩群に依拠した非論理的な見解の方こそが、思索においても最重要なるものということができる。別言すれば、私たちがこれこそ本質的であると思いきもってきた概念体系(洞察)とは、畢竟、生きのびるための隠喩に支えられた見解のいわば理性的変種であって、そもそもその成立時から人間のために、人間的な歪曲を余儀なくされていたものであったのである。したがって、その根元に遡及すればあやしげで非論理的でしかありえない

5 フッサールの生活世界については、
 フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫、木田元訳、中公文庫、中央公論新社、2006、pp.187-331。
 フッサール『デカルト的省察』、浜渦辰二訳、岩波文庫、岩波書店、2007、p.237。
 木田元『現象学』岩波新書、岩波書店、1973、pp.55-69。
 西研『哲学的思索：フッサール現象学の核心』ちくま学芸文庫、筑摩書房、2005、pp.291-293。
 生活世界概念史の鳥瞰と、ブルーメンベルクにおける生活世界概念については、
 Felix Heidenreich, Mensch und Moderne bei Hans Blumenberg, Wilhelm Fink Verlag, 2005, S.106ff.
 Phillip Stoellger, Metapher und Lebenswelt. Hans Blumenbergs Metaphorologie als Lebenswelt-hermeneutik und ihr religionsphänomenologischer Horizont, Band 39 der Reihe Hermeneutische Untersuchungen zur Theologie, herausgegeben von Hans Dieter Betz, Pierre Bühler, Ingolf Dalferth und Dietz Lange, Tübingen 2000.

概念体系が、もしも従来どおりに本質的なものであると見なされうるとするならば、それを成立させている大元のおびただしい非論理的なる隠喩的認識（見解）もまた、論理的な概念体系に劣らず本質的なものであるにちがいない。

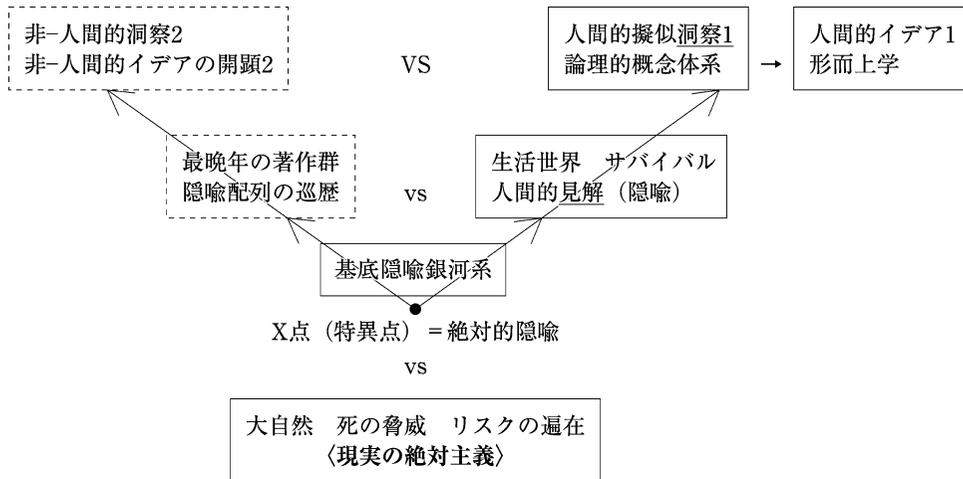
いずれにせよ、人間的に歪曲されたそうした認識は、洞察であれ見解であれ、人間的限定にとらわれない洞察——これを仮に“真の”洞察と呼んでおこう——にはほど遠いものではある。したがって、そうした“真の”洞察なるものが例えばプラトンのアイデアにある意味予覚されていたとしても、ブルーメンベルクによれば、人類は、少なくとも西洋思想は、そのあるべき洞察に到達したことは未だかつてない。しかしまた、それは全的に不可知なものというわけでもなく、もしかすると将来獲得されうるものかもしれないが（「やがてそうなるかもしれないが」）——実はそれこそが、ブルーメンベルク最晩年の旺盛な執筆において、秘かに意図されていた秘儀でもある——、生物種のひとつにすぎない人類として、私たちがこれからも生きのびる、すなわちサバイバルしていかなければならないとするならば、論理的な洞察 *Einsichten* に先立つその非論理的な見解 *Ansichten* の方こそが、私たちが現実に動かしてきた、そして今も動かしている最重要なるものに他ならない。

かくして、ブルーメンベルクにおいて概念体系といわれるものの根本に立ちかえって、非論理的な工夫を自在に凝らしうる隠喩というものの魔術的叡智に庇護され発展してきた西洋の思想史や文化の歴史の全貌が、幽暗なる“根の国”から、隠されている出生の秘密から、不気味に照射されていく。太古以来、サバイバルをこそ最重要基準として駆動されてきた私たち人類の、「生活世界」に依拠したりアルな思考のからくりや歴史が、ブルーメンベルクの隠喩学というニーチェ直系の系譜学的方法によって明らかにされていくのである。

とはいえ、それら概念体系、生活世界、大自然相互の関係も、またその入り組み様を解き明かしてみせるブルーメンベルク自身の言も、正直いってひどくわかりにくいものといわざるをえない。そこで、これからブルーメンベルクを論じていくに先立ち、ブルーメンベルクの思索迷宮を歩む際のとりあえずの簡便な地図、ないしは青写真や海図に類したものとして、それらの粗略な関係図を下に記しておく（図3）。図における点線部分は、ブルーメンベルクによって秘かに企図されている青写真、と筆者高橋が推定しているものを、本論における論述に先立ち、先取的に補足してみたものである。また、本論最後の第7節において言及する、ぬきんでて重要な基底隠喩群が、絶対的隠喩と「生活世界」との間につくりだす基底隠喩銀河系（ギャラクシー）——実はここが実際の“根の国”である——については、本論の主対象ではないと考え、あえて小さく記すだけにとどめている。

思考はつまり隠喩を経ずしては形成しえない。だが、客観的、論理的認識（いわゆる洞察、但し正確には「人間的な、あまりにも人間的な」（ニーチェ）歪曲をたっぷりと受けた一種擬似的な洞察群にすぎない概念と、それによって構築される概念体系）が、それに先立ちアプリアリ的に生成されていたともいえる「生活世界」の隠喩的諸見解に依拠して、寄生的に増殖され

図3 ブルーメンベルクにおける自然と形而上学の関係



ていたものとするならば、その後、思考の表舞台からは隠されどこかに忘却されていったあの「せむしのこびと」ならぬ隠喩的見解の数々を、では、人は、そしてブルーメンベルクは、どのようにしてその忘却の闇の奥から掘りおこしていくことができるのだろうか。

そのための具体的な方法論を、ブルーメンベルクは、あるひとつのメタファー（隠喩）の変遷経緯の追尾に見てとった。例えば、『世界の読解可能性』では、神の啓示や自然世界が書物として書かれ、人はそれを読むことができるとした「書物メタファー」（本論では書物隠喩とも記す）の変遷経緯を、古代ギリシアのプラトンから現代のDNA 遺伝子解読までを執拗に追尾してみせる。その第1章「経験可能な全体のためのメタファー」では、その方法論が次のように披瀝される。

しかしまさに自然と世界の全体性というメタファー Metaphorik で重要なのは、一人の作家の表現手段同士が相互にうまくかみ合い、相／互に支え合って意味を照らし出したり、あるいは相互に妨害したりするようなときの整合性 Stimmigkeiten の度合いである。それがうまくいったときのみ、そのような巨大な全体を支える、色あせたままであるしかない概念性は、基礎的なものというよりは意味深長で底の見極めがたい具象性の助けを求めることができるのである。そうしてのみ、「現実的なものはわれわれに対してどのような姿を現すのか、ある時代やある作家にとって現実的なものがどのように現れてきたのか、あるいはこれから現れてくることになるのか」という問いに記述的な答えを与えることが、あるいは少なくとも問題設定をより厳しくすることができるのである。（『世界の読解可能性』、pp.8-9、stw, S.15、下線や改頁を示す／印、独語補足は高橋）

論理的な世界認識に、非論理的で具象的なイメージの隠喩（メタファー）が恵与される時、すなわち「色あせたままであるしかない（骨組みだけの）概念性」（括弧内補足は高橋）に血のかよった目に見える肉体が与えられる時、思想は初めて生きた整合性を獲得することができる。これが、まずブルーメンベルクにおける思想生成の基本構図である。その生成ないしは肉化は、「生活世界」とフッサールが呼んだ曖昧な領域において秘かに行われる。より正確には、その「生活世界」のそのまた奥底に隠されている“根の国”において行われる（これが、本論の末尾で触れられる基底隠喩群のつくりだす宇宙、「基底隠喩銀河系・基底隠喩ギャラクシー」（高橋）である）。だが、“根の国”におけるそのような隠微な繋がりと絡み合いは、人の目にはほとんど見えない。何より人々の目からは深く隠されている。したがって、私たちが手にしうるのはその思想の論理的相貌をとる結果だけであって、思想の非論理的でリアルな生成過程は認識のしようがない。

だが、思想家が論理の整合性に難渋する時、実はその思想体系には深い亀裂が走っている。その亀裂は、隠喩によって、とりわけ絶対的隠喩によって修復される。いいかえるならば、傷は癒されて消失する、少なくとも消失したように見える。しかし、眼を凝らすならば、消えたはずの傷跡はやはりそこに厳然と残されている。隠喩の使われ方に着目するならば、その思考体系の内に亀裂（論理破綻）が走っていた事実は、隠しようがないのである。そして、ずばりそこにこそ隠喩に対する異様なセンサーをもつブルーメンベルクの魔的な嗅覚が食いこむ。その思想家が、そしてその思想家の論理的な思考体系自身が、最も隠しておきたいと願う幽暗なる裏舞台への絶好の入り口が、その亀裂にぽっかりと開いているからである。その亀裂は、概念と概念との狭間、論理的洞察なるものが成立しうるそのままに一步手前、すなわち洞察によって思考が最終的にその形態を確定しうるその直前の瞬間であり、一步間違えれば無限に変態するだけの不確定性に満ちるカオスへと転落しかねない、カオスにほぼ接し、そこに呑みこまれかけている臨海的・臨界的な境域である。ブルーメンベルクの炯眼がすりと入りこむ潜入劇が演じられるのは、まさしくそのような危機的狭間においてのことなのである。

これらのメタファーにおいて扱われるのは、最終的な真理や存在論や存在の歴史や形而上学ではない。われわれがそうしたメタファーで考察することになるのは、むしろ、他のものに先行して、他の諸事情を調整し、その色を染め変える解釈可能なもの、それでいて対象の確定性 Bestimmtheit の此岸（こちら側すなわち不確定性の領域）にありながらも、全体の、そしてその全体の未決定なままの可能性の、完全な不確定性 Unbestimmtheit は認めない解釈可能なものであろう。どのような経験も完／全な不確定性の空間では動けないし、その対象の因果的な諸連関を単に直線的に追体験することもない。このような確定的不確定性こそ、世界の経験可能性のためのメタファー Metaphorik が取り組むものであって、「読解可能性」のパラダイムはこの世界の経験可能性を代表するものである。（『世界の

読解可能性』、pp.9-10、stw, S.16、下線、括弧内補足、改頁を示す／、独語補足は高橋)

論理や概念がめざす確定性Aと確定性Bとの狭間に裂け目が横たわっている。その奈落の上に、亀裂の間にいかにして橋を架けるのか、いかにしてその奈落を飛び越えていけるのか。その不可能と思えるアクロバットを隠喩が行う。確定性Aと確定性Bとの間に走る奈落の上に「確定的不確定性」bestimmte Unbestimmtheit という新境域が、万華鏡のように変幻する現実の不確定性とどっしりとした確定性との融合体が、架けられる。カオス(変態)そのものとは異なり非変態的であるとともに、しかしまた概念体系とも異なり非論理的でさえある隠喩が両義的にうごめき、変態にして論理的でもある不思議な境界領域を創りだす。その境域のまっただ中へと、ブルーメンベルクの魔的な嗅覚は、尾をうれしげにうち振りながら、蛇のようにすると潜入していくのである。

2 絶対的隠喩の非一貫性

そのブルーメンベルクの隠喩学の中心におかれているものが、「絶対的隠喩」die absolute Metapher という、鬼面人を驚かすまことに奇妙な概念である。ドイツ文学者ベダ・アレマンは、『隠喩と詩の隠喩的本質』(1968)において、あらゆる関係性を断ち切り、比較の対象を欠き、還元されるべき本来の意味がなくなり、テキスト自身への言及性のみが残る20世紀のカフカの隠喩を「絶対的隠喩」と呼んでいたが⁶、ブルーメンベルクのそれは、そのような文学的なものとは大きく異なり、論理的な概念や、その基盤となる隠喩群の入り組む「生活世界」の非論理的な見解をも庇護し、それらの豊かな生成活動を厳として保証してみせる根拠なき根拠、理由を示すことなきがゆえに絶対的でしかありえない不動で不可視の隠喩として措定されている。

そのような絶対的隠喩の具体的な例として、ブルーメンベルクは『隠喩学のためのパラダイム』(Hans Blumenberg: Paradigmen zu einer Metaphorologie. stw1301, 1998. 初出は1960、以後同書はParadigmenと略記する)において、裸の真理隠喩、書物隠喩、時計隠喩、起源隠喩、蓋然性隠喩、未踏の地隠喩、未完の宇宙隠喩、円環隠喩等を列挙している(stw, S.61, 105, 117, 183usw. cf. 高橋『隠喩論Ⅳ』pp.51-52)。その重要な論考(1960)に先だって発表されていた『真理の隠喩としての光——哲学の概念形成の前庭において』(Licht als Metapher der Wahrheit. Im Vorfeld der philosophischen Begriffsbildung. In: Studium Generale, 1957, Heft7, 10. Jahrgang, S.432-447. 邦訳『光の形而上学——真理のメタファーとしての光』、エ

6 Beda Allemann: Die Metapher und das metaphorische Wesen der Sprache. In: Weltgespräch, Bd. 4. Welterfahrung in der Sprache. 1. Folge, Freiburg iB., 1968, S.29-43.

ピステーマー叢書、生松敬三、熊田陽一郎訳、朝日新聞社、1977）における光と闇の隠喩や、後に刊行された『難破船と傍観者——存在隠喩のパラダイム』（Schiffsbruch mit Zuschauer - Paradigma einer Daseinsmetapher, Bibliothek Suhrkamp, Suhrkamp Verlag, 1979. 邦訳『難破船』池田信雄、土合文夫、岡部仁訳、哲学書房、1989）の主題となっている難破船隠喩等も、ブルーメンベルク自身の定義にしたがえば、そうした絶対的隠喩の範疇に当然はいるものである。例えば、円環隠喩については、『隠喩学のためのパラダイム』の終わりにその解析例がデモンストレーションされており（stw1301, S.190ff.）、また、そこでの定義や見本例を基本的な見取り図として、ブルーメンベルクではその後、諸著において隠喩探求が本格的に実践されていく。特に彼が教授職を終えた直後の1986年から1996年の逝去にいたるまでの10年間、精力的に執筆、刊行していった後期の著作群においては——その死後も未刊であった膨大な原稿が続々と刊行されている——、例えば『洞窟からの出口』Höhlenausgänge（stw1300, 1989）であれば、プラトンの洞窟の比喩（『国家』）やそれに先立つ神話的な洞窟くぐりが、といったように、絶対的隠喩といわれる隠喩がひとつひとつの著作に割りふられ、それら個々の絶対的隠喩の遍在と威力の多様きわまる変遷史が古代から現代にまで展覧されていく（cf.『隠喩論Ⅳ』p.60には、筆者高橋が「西洋文学の象徴体系」に基づいて独自に確認したブルーメンベルクの思考と物語軌道、すなわち「V字プロセス」の軌道上に配置されている各象徴の里程標一覧が載せられている）。

けれども、ブルーメンベルクが、ある意味、世界で初めて構想したともいえるその隠喩学 Metaphorologie の、まさに中心概念をなすはずのいわゆる絶対的隠喩には、その奇矯な、しかし実に印象的な命名にもかかわらず、ないしはそれがゆえにか、その概念の内実や実際が必ずしもすっきりと胃の腑に落ちるといったものではない曖昧さがつきまとっている⁷。『世界の読解可能性』の邦訳者である山本尤氏の「訳者あとがき」でも、そのことに対する不満が次のように書かれている。

7 ブルーメンベルクにおける絶対的隠喩の不明さについては、
 Hans Blumenberg: Paradigmen zu einer Metaphorologie, stw, S.9.
 Stoellger: Metapher und Lebenswelt, S.83.
 Oliver Müller, Sorge um die Vernunft. Hans Blumenbergs phänomenologische Anthropologie, mentis Paderborn, 2005, S.144ff.
 Franz Josef Wetz: Hans Blumenberg zur Einführung, JUNIUS, 2004, S.26.
 Stephanie Waldow: Der Mythos der reinen Sprache. Walter Benjamin, Ernst Cassierer, Hans Blumenberg. Allegorische Intertextualität als Erinnerungsschreiben der Moderne, Wilhelm Fink Verlag, 2006, S.240ff.
 Rüdiger Zill: Wie die Vernunft es macht. Die Arbeit der Metapher im Prozeß der Zivilisation. In: Die Kunst des Überlebens. Nachdenken über Hans Blumenberg, hrsg. v. Franz Josef Wetz, stw1422, 1999, S.180f.

(…)ブルーメンベルクはそこでは特定のメタファーの形成過程を単に歴史的に数え上げるだけで、この絶対的／メタファーの内容を十分に説明しているとは言えず、このメタファーが何を表現しているのかも必ずしもわれわれに明確に示すことができているようなのだが、それにもかかわらず、思考の下部構造へ、体系的結晶化の基盤へ、その培養液へ切り込んでいく姿勢は一貫している。(…)ベンヤミンの言う「伝達の不可能性」、スーザン・ソントグの言う「沈黙」、ピエール・マシェレーの「不在性」、ロラン・バルトの「言語の前記号的状態」、クリステヴァの「記号的なもの」、デリダの「非-場所ないし非-知の様態の体系化」などの発言はさまざまな動機からなされたものであるが、ブルーメンベルクがそうしたさまざまな立場以前に「言語の意味論的奉仕価値の拒否」に向けての解釈学的基盤を作っているとも言えよう。(山本尤「訳者あとがき」、『世界の読解可能性』、pp.444-445、下線、改頁の印／は高橋)

ブルーメンベルク自身による隠喩学のマニフェストともいえる先ほどの『隠喩学のためのパラダイム』には、もちろんその絶対的隠喩についての定義が示されている。筆者のブルーメンベルク論『隠喩論Ⅲ』『隠喩論Ⅳ』において繰り返し引用されていることもあり、いささか食傷気味の感がないでもないものの、読者に確認していただくため、その名高い定義をここにもう一度引用してみることにしよう。

絶対的隠喩とは、あのいわゆる素朴で、原理的には答えられない問いに対して「答える」ものである。そうした問いの重要性はひとえに、私たちがそれらの問いを立てるのではなく、存在の根底に im Daseinsgrund 立てられた問いとしてそれらを見いだすがゆえに、それらを消去することができない、という点にこそある。』(Paradigmen, S.23、太字すなわち強調は原文、下線と独語補足は高橋による)

しかしながら、それまでの思考法を根幹から見直そうとしているブルーメンベルクの隠喩学のまさに中心にあるのでは、と思えるその絶対的隠喩には、先ほど引用した訳者山本氏による不満にも示されていたように、これといった具体的なイメージや豊かな肉付け等、事例の明快な提示という点ではひどく曖昧であり、絶対的隠喩という概念のリアリティはもちろんのこと、それが人間の思考や活動においてどのような位置にありうるのか、実際にどのように位置づけられているのか、といった肝心なところになると、一貫性に欠けているのではないか、というのがやはり正直な感想である。

絶対的隠喩とは、「答えられない問いに対して「答える」もの」である。それは当然不条理な事態であり、答えになっていない答えとして、根拠づけることのできない答えということでもある。しかしながら、根拠づけることができないがゆえにこそそのような隠喩は、絶対的

absolut と命名される。「存在の根底に（おのずと）立てられた問い」に対して、答えようがない形で答える絶対的隠喩とは、すなわち答えることのできない“問いにして答えでもあるもの”である。というよりも、より正確には、立てられたことそれ自体がすでに答えとなっているもののことである。気づいてみたら答えられている。それゆえ、光や闇等といった隠喩のように必ずやそこに浮上してくる根底的なものも一定数ありうるとしても、問いにして答えなる摩訶不思議なものが存在の根底にいつしか立てられているという事態に、それもいわば衝立のように立てられていたというその記憶喪失的な不思議なる事態にこそ特別の比重が置かれていると解するならば、絶対的隠喩とはいっても、特にある特定の隠喩群であるべき必然性すら実際にはあるはずもなく、極端にいえばいかなる隠喩であっても、それを解読するブルーメンベルクが、これは絶対的隠喩であると洞察、命名ないしは勧請するならば、そこに絶対的隠喩なるものが確認ないしは誕生するともいえるのである。そのため、上記のブルーメンベルク自身による有名な定義を説明されたところで、絶対的隠喩の実態が、私たち読者にとって依然曖昧であることには変わりがないのである（cf. 『隠喩論Ⅳ』）。

例えば、『世界の読解可能性』において遺伝子コード読解を論じた最後の章、第22章中には、次なる一文がある。

長大な論文のこの最後の一文が、ミーシャーの他の論文には見られない「張力」という表現を用いることによって、彼がまだ到達できないでいるものに手探りで近づくための指針としているその背景メタファー（＝張力）によりいっそう深く肩入れしている。（『世界の読解可能性』第22章、p.422、stw, S.393、下線、括弧内補足は高橋）

ここでは「張力」が、言外の暗示的な隠喩を指す「背景メタファー」という呼び方をされている（cf. Paradigmen, S.114）。『隠喩学のためのパラダイム』の中では「背景メタファー」なるものは、なるほどある事態の背景をなすものとして、絶対的隠喩とはやや異なるものとして位置づけられているようにみえる。しかしながら、絶対的隠喩とは、存在の根底におのずと浮かびあがる、いつの間にか立てられていることによって、つまりいつしか姿を現していたその神出性によって、人が、その思想が現在おかれている不能状態を、将来の可能性の領域へと非論理的に、すなわち無条件的に飛躍させ、無から有を捻出させる魔法の杖として働くものである。とするならば、いつしかそこに背景としてあり、自明の根拠としての働きをしているこの「張力」隠喩もまた、ある意味では絶対的隠喩と呼ばれてもおかしくはないものである。

それは、次のケースにおいても同様である。科学者シャルガフはDNAとRNAの遍在性に関する予言を行い、それによって遺伝子研究は大きく進展した。だが、その予言には実は何ら科学的根拠と云うものもなく、科学の未来に関わる重要な予言とビジョンは、つまるところ科学的な論理に基づいてではなく、“暗号”という非科学的で非論理的な隠喩（メタファー）に

依拠してなされていた一種の空想以上のものではありえない。では、それは単なる空想にすぎなかったのかというところではなく、むしろ“暗号コード”という非科学的な隠喩の闇雲な投入がなければ、遺伝子研究は頓挫し、路頭に迷っていたに違いない。隠喩が大きく広げてくれた空飛ぶ魔法の絨毯に乗ってシャルガフが夢想を隠喩次元で、未在する未来に向けてはばたかせたことが科学を大きく前進させることになったとするならば、その魔法の杖のひと振りですべての根拠の装いやビジョンを科学者たちに望見せしめたその“暗号”なる隠喩は、その果たしていた実際の機能から判断するに、絶対的隠喩と呼ばれても少しもおかしくはない。

今日では、どんな子供でもそれを知っている、と言っても過言ではないが、(人々にとって科学的な DNA 云々が)それだけ説得力をもって感じられたのも、それが暗号コードというメタファー Metaphorik des Codes、つまり DNA の文法、RNA のメッセージ性ももっていたためである。それは、そのメタファー態 (暗号コード) というのが、その根源に立ち帰 (れば人々の意識に対してその力を存分に発揮しよう) るところ、すなわち高度の暗示性を持つ (って人々にアピールしよう) 修辭的なプロセスだからである。(『世界の読解可能性』 p.408、stw, S.380、下線、独語補足、括弧内補足は高橋)

論理的な装いをとるかにみえる思惟体系や科学における仮説も、その大元に遡及する時、生き生きとしたイメージを繰り広げてはくれるものの、論理的根拠があるのかは定かならぬ薄暗い“根の国”の隠喩宇宙 (基底隠喩銀河系) にたどりつく。その隠喩という修辭的技法による、非論理的で非科学的な、ほとんど牽強付会的な導入や、賭けにも似た未来への妄想的投企、すなわち隠喩イメージによるはかな彼方への強い光の照射があったればこそ、科学の未来を大胆に切り開く有効な予言と、彼方の未踏の地を想定した論理的な科学的成果とが可能となる。見た目や主張とは大きく異なって、学問的な根拠のみならず、あるいはそれ以上に、人の強い願望とは直接地続きとなっている隠喩が、科学における理論の死活を決めるいわゆる生命線にぎっている。それゆえ、理論だけであれば陥らざるをえない窮地を一挙に反転させ、そのどん底から科学を発見の光や整合性の地へと救済してみせる、「存在の根底に立てられ」る「暗号コードというメタファー (態)」すなわち隠喩表現もまた、絶対的隠喩とは呼ばれてはいないものの、科学者シャルガフにとってのまさに絶対的隠喩であったように思われるのである。

だが、そのように解してみると、いくつか腑に落ちない事態に直面する。絶対的隠喩を扱いながらブルーメンベルクは、なぜかそれを絶対的隠喩とは呼ばず、たんに「メタファー態」とのみ称していたからである。これに類するケースは、『世界の読解可能性』のみならず、ブルーメンベルクの著作全般に頻繁に見られるもので、その場合、本来絶対的隠喩とよばれてしかるべき隠喩は、隠喩 Metapher やメタファー態 Metaphorik と表現されたり、時には上の引用のように、たんに修辭とのみ記されることさえある。(『世界の読解可能性』の第 5 章「啓示の書物

と自然という書物、後者の台頭と遅滞」で、スコラ学の前段階をなすものとして論じられているオクスフォード初代学長グロステストにとっての「書く手のメタファー」も、実際としては絶対的隠喩と明記してもよいものと思われるのだが(同、p.54、stw, S.55.)、どうしたことかこれまた絶対的隠喩と記されることはない。

同章のメインをなす古代の最後を飾る教父アウグスティヌスにとっても、その書物メタファーは、神によって創造されたこの世界を峻拒するグノーシス派が正統キリスト教に対して突きつけた批判がもたらしかねない、思考と教義での敗北と瓦解の危機から、キリスト教神学を救済する根拠なき切り札として、すなわち奈落一步手前にある「存在の根底に」において、奈落への転落を食い止めるためおのずと立てられてきた問いにして答え(絶対的隠喩)として強く要請され、歓喜雀躍導入されたものであった(同、p.48、stw, S.49f.)。近代科学の曙をとりあげた第8章「読解可能性の不均衡」中のフランシス・ベーコンにとっても、二つの書物、すなわち神・天の啓示の書物(聖書)と自然という書物という隠喩が、天と地、神と自然との間の対立を無条件に、すなわち無根拠に調停してくれるずばり絶対的隠喩的なものともちいられている。しかしながら、その切り札となった書物メタファー(書物隠喩)は、そのいずれのケースにおいても、たんにメタファーや修辞と記されているにすぎない。とってしまえば、書物メタファーというその著作中の表現そのものに、絶対的隠喩の意味がブルーメンベルクによってあらかじめ含意されていた、とも思いにくい。

こうした奇妙な非一貫的な措置は、この『世界の読解可能性』なる著作全体を通じて顕著にみられる現象である。同じ第8章の近代科学の確立者デカルトにおいても、哲学者デカルトは、ありもしないすなわち何の根拠もありえない「神の誠意」「神の真実性」なるデウス・エクス・マキーナ(絶対的隠喩・黄門様の印籠)にすぎることによって、世界の読解可能性におけるすべての矛盾を昇華ないしは雲散霧消させようとしていた(pp.93-94、stw, S.93f.)。そのデカルトを継承しつつもデカルトに強く反発したユダヤ系オランダ人スピノザにおいても、根拠なき根拠を自明とする書物隠喩の手品そのものは踏襲される。「失われた原書」(p.105、stw S.105)という新しい書物メタファーがスピノザにより捏造され、その新しい書物による思考体系の「配置換え」(p.105、stw, S.105)、すなわち世界像の再編集が企図される。聖書という天による啓示の書を相対化・空白化する第1段階的な措置の後に、世界のあるべき根拠を、根拠とはなりえない不在かつ未在する「失われた原書」の方へと置き換えていくという詐術的作業が、スピノザでは第2段階的措置として遂行されるのである。既存の枠組みをすべて覆した後に(第1段階)、新しい書物パラダイムが、すべてを是認する魔法の杖としてあらわれてくる、とスピノザは夢想したわけである(第2段階)。

この根拠なき無限根拠ともいふべき「失われた原書」に関する妄想的イメージ、すなわち根拠のないいいかがわしい書物隠喩が、混迷に陥っていた(とブルーメンベルクが推定する)スピノザやその同時代人たちの思索や概念体系を、その思考継続の不能状態(一)から救済して、

図4 スピノザの二段階構想



そこに未来からの保証（+）を与えていくのである（同、pp.104-105、stw, S.105）。根拠なき夢想への執着と、それによる蘇生、これはもう、カオスへの瓦解を食い止めるべく無意識の薄明からなぜか自動的に発生してくる（＝立てられた）あの魔法の絶対的隠喩以外の何ものでもありえない。

ちなみに、本論およびそれに続く予定の『隠喩論VI』の考察結果を先取りした形でいえば、スピノザのこの二段階的思考（図4）は、ブルーメンベルクのこの著作全体に隠されている秘密の構想企図と親和・共振する戦略とでもいうべきものである。それというのも、この難解きわまる書物『世界の読解可能性』や、その他の諸著においてブルーメンベルク自身が秘かに遂行しようとしていた思考作業と、スピノザのそれとは、実はほぼ平行な企てになっている、と筆者には思われるからである。まず既存の世界の意味探求の企てと成果（疑似的な洞察）を消去し、それらをすべてきれいに空白化し白紙とした上で（第1段階）、その不毛一元の真っ白な彼方に、不在かつ未在する未知の、もしかすると真であるかもしれぬ洞察を求めて旅立たんとする。ここ『世界の読解可能性』においては、それは第2段階をなす最終的な目的として予告され、夢解釈とDNA 解読に、非-人間的である新たな「失われた書物」への萌芽がほのめかされる。こうしたブルーメンベルク自身が採用することになる二段階的探求方法を、スピノザはいわば先取り的に行っていたともいえるのである。

とはいえ、そうした青写真や絶対的隠喩が明示的なものであったのか、明快な提示や説明がそこにおいてなされていたのかとなると、これはもうはなはだ疑問ではあり、ある時は顕示的に表出されるもののある時は非顕示的に抑えられていて、しかもそれら多様な隠喩を絶対的隠喩として顕示する／顕示しない（命名する／命名しない）基準も理由も明示されない。絶対的隠喩というターム（専門用語）自体のわかり難さもさることながら、明示と非明示との落差のそうした奇妙なまでの大きさや、ある隠喩のみを特別に取りあげてそれを絶対的隠喩と命名する取捨選択基準の不分明さは、たださえ難解なこの書物を繙く者たちをいっそうとまどわせずにはおかない。

それは、ブルーメンベルク自身の思考の混乱や、その思考の不十分さによるものだろうか。それとも、ブルーメンベルクの炯眼がそれを不可避であると断じて、あえて採用したことによるある種の韜晦的な表現によるものなのだろうか。

しかしながら、その絶対的隠喩の実際を『世界の読解可能性』を例として具体的に検討し、その入り組んだメカニズムをひとつひとつ解きほぐしていく時、私たちは、その奇妙なまでの

屈曲と韜晦めく書法の彼方に、今初めて、ブルーメンベルクによるある秘密の構想と思考の運動（V字プロセス）をまのあたりにすることになるのである。

3 『世界の読解可能性』における絶対的隠喩

『世界の読解可能性』（1981）は、大著『神話づくり』Arbeit am Mythos（Suhrkamp Verlag、1979）とともに、彼の思考活動におけるいわば転換点をなすものとして、ブルーメンベルクが教授職の終わりの時期、ミュンスター大学在職時代に踵を接するようにして書かれた2作のうち第2作目の著作である。

それは、自然という書物を解読する「書物メタファー」Buchmetapherなる（絶対的）隠喩——『隠喩学のためのパラダイム』ではそのひとつとされていた——の複雑な変遷史がたどられている。ところが、著作『世界の読解可能性』のタイトルでもあり、事実また本文中で頻繁に言及され論じられるその当の読解可能性 Lesbarkeit、すなわち世界を書物として解読する「書物メタファー」が、絶対的隠喩であるとしてそこで特に明言されることはなく、それどころか、そもそも『世界の読解可能性』において「絶対的隠喩」という表現が用いられているケースそのものからして、わずか3章5回を超えることはないのである。それは、哲学者パークリを論じた第11章「ロビンソン世界対ニュートン世界」、絶対的隠喩を列挙しているとされたシラーの書簡からの引用がなされている第15章「[どのようにして自然という書物が私にとって読解可能になるのか…]」、そして、ショーペンハウアーをフロイトの先駆としてとりあげた第20章「夢解釈の準備」の計3章である。絶対的隠喩という概念が、ブルーメンベルク隠喩学の方法論の要として置かれていながらも、それが明言されている章は全22章中わずか3章（13%）にすぎない。これは、確率的には随分と低いといわざるをえない。それだけではない。その奇怪なターム（専門用語）の出現箇所にもまたかなりの偏りがあり、この著作を繙き理解しようとする者にとっては、これまたどこかひっかかる事態ではある。というのも、第15章、第20章では各一回ずつの言及であったのに対して、ニュートン・デカルト（視覚）対パークリ（触覚）の世界観対決が演じられる第11章では、絶対的隠喩なる特殊表現が、一章の中で何と3度も大盤ぶるまいされているからである（図5）。

図5 絶対的隠喩明示回数

言及章	絶対的隠喩を活用した思想家	明示回数
第11章	①ニュートン ②パークリ ③ヴォルテール	3
第15章	シラー	1
第20章	ショーペンハウアー	1
総計	3章5人	5回

①ニュートンにとっての空間という絶対的隠喩、②パークリにとっての触覚という絶対的隠喩、そして③章末に言及されるヴォルテールにとっての印象主義（美的作用連関）という3つの絶対的隠喩がそれである。異常に低い全体での出現頻度に比して、1章中に3度の大盤ぶるまいという事態がまず奇異であり、さらにまた、そこで詳説されている感のあるパークリの②触覚を除けば、①空間や③印象主義（美的作用連関）といった絶対的隠喩と呼ばれているそれ以外の2つのものが、どこかどさくさまぎれ風に、ほとんど唐突に、ほんの一瞬言及されるだけといったひどく不親切な書き方になっている。

そうした奇異な投入のされ方や配置には、しかしながら、背後に何か別の意図が隠されているのではないかと思わせる、いかにも不審なるものがないではない。というのは、それらのケースも、絶対的隠喩が関与しそうな他の膨大な箇所と同様に、実際にはたんに隠喩（メタファー）とのみ呼んで済ましえたかみせれば、あえて絶対的隠喩として表現する必然性がはたしてブルーメンベルクの側にあったのか、もしかすると、そのように命名される必然性などなかったのではないかと、といった疑念すら浮かんでこなくもない微妙なところが十分にあるからである。おそらく、ブルーメンベルクのような怪物的な才能にとって、表面上の一貫性や整合性を捏造することはいと易きことであつたに違いない。絶対的隠喩という特殊表現のずいぶん曖昧で、一貫性に乏しいそうした使用の実態をまのあたりにする時、この第11章において、ブルーメンベルクは、絶対的隠喩をその本来の意味で用いているだけではなく、さらに何か含むところがあつて、ある種の重要な秘密の信号としてもまた強引に挿入したのではないだろうか、といった疑いすら兆してくるのである。

その疑念に答えるためには、絶対的隠喩の実際をひとつひとつ確認してみる必要がある。それゆえ、ここからは、『世界の読解可能性』のうちに絶対的隠喩が登場してくるその3章及び5箇所での使われ方をすべて具体的に検証して、ブルーメンベルクにおいて絶対的隠喩がどのようなものとして配備されていたのか、その実態を確認してみようと思う。

シラーとゲーテの読解可能性隠喩を論じた第15章「[どのようにして自然という書物が私にとって読解可能になるのか……]」において、ブルーメンベルクはシラーの書簡の一部分を引用し、そこに時間、円環、真理といった絶対的隠喩が列挙されている、と指摘している。以下の引用中下線部が、『隠喩学のためのパラダイム』（stw, S.61, 105, 148, 183）においていわゆる絶対的隠喩とされていたものである。

読解可能性が自然、歴史、芸術を結びあわず究極の共通項になる。「私は自然という楽器を通して、世界史を通して、無限なるものと語り合い——私は芸術家の魂を彼の作ったアポロ像の中に読む」とシラーは語る。まるでヴィーコがこの読解可能性概念の展開に手助けでもしたかのごとく、シラーはメタファーを用いて、すなわち伝統の中で形作られてきた

偉大で絶対的なメタファーを次々と繰り出して、この読解可能性という概念を解明してみせる。「活／甞な活動をわれわれは火と呼ぶ。時間^は後ろから引きさらっていく流れである。永遠は円環である。秘密は深夜に包み込まれ、真理は太陽のうちに住まう」と。
 (『世界の読解可能性』、pp.232-233、stw, S.221。下線や改頁の印／は高橋)

たしかに、そのシラーの書簡には絶対的隠喩とおぼしきものが羅列されている。しかしながら、ブルーメンベルクのいわゆる絶対的隠喩がシラーの書簡中に言及されていたことと、その引用されている書簡中の隠喩表現がシラー本人にとって実際に絶対的隠喩として機能していたのかということとは、まったく別の話である。事実、そこに挙げられている四大のひとつ火や、時間、円環、真理といったいわゆる絶対的隠喩群が、シラーにとって切実なものとして存在しないしは動員されている事態がここで示されているわけではなく、そもそも、ブルーメンベルクのこの著作の中心主題となっていた読解可能性という隠喩(書物隠喩)が、はたしてシラーにおいても絶対的隠喩といえるほどの深甚なものとして受けとめられていたかどうか、この短い引用からだけでは不分明である。それどころか、ブルーメンベルクによるならば、シラーの場合、読解可能性はむしろ空転する。なぜならば、シラーのいう自由な人間の側には、実は主体的な解読の自由などそもそもありうるはずもない。神を絶対的に是認したいシラーにとって、柔軟な解読を許容するという意味での暗号性や記号性は存在しえなかった。神がすでにすべてを決定してしまっていたからである。

暗号はいつも常に他の言語を指し示すものだが、シラーのメタファー態 Metaphorik にはそのような記号性は何もない。(同、p.233、stw, S.221、独語補足は高橋)

だが、柔軟性と自由な主体性を内包する隠喩(書物隠喩、暗号)をもちいながら、その自由をこそ剥奪してしまう自身の思考におけるこの矛盾に、自由の使徒シラーは引き裂かれ、困惑する。象徴を駆使した神の文言(事象)の自由なる解読か、それとも決定論的な、つまり自由のない観相学的解読か、そのいずれが人に与えられているのだろうか。この埒のあかない矛盾と亀裂に、「ここにシラーの不確かさの根があ」(p.233、stw, S.221)った。

けれども、その不確かさこそは、隠喩学 Metaphorologie にとって啓示的となるあの亀裂、「メタファーとしての矛盾はメタファー学の開始点」(p.233、stw, S.221)と語られていたあの亀裂であった。ブルーメンベルクみずからが第1章で宣言していたように、こうした亀裂こそは、その詩人における精神の実相と窮状、危険な不確定世界に対峙する時のその人の真なる位置を露わにするもの、まさにそれへの恰好の取っかかりとなりうる美味なるものである。その自己の精神のうちに走る残酷な亀裂の存在を糊塗するために、ほかならぬその窮境なる瞬間に、人は隠喩を万能の救世主として、しかも無意識裡に動員し、隠喩の魔法の絨毯に乗って亀裂の彼

方へとまさに非論理的に跳躍し、ふんわりとしあわせに満ちて着地する。そして、その後はそのような亀裂などそもそも存在していなかったかのように思いこむ。

ところが、人間の自由か神の決定論かに分裂しかねないその窮地においてシラーにとり実際の救世主となったのは、ブルーメンベルクによって列挙されていた先の絶対的隠喩群の方ではなくて、上記の文章（『哲学書簡』）に先だって書かれていたラインヴァルト宛て書簡中に言及されていたという鏡の隠喩の方であった。いうまでもなく、鏡はその前に置かれた事象を映し返すという特性を有している。万物もそこに映し返される。万物は、神によって造り出された被造物として神そのものでもある。それゆえシラーにあって万物は鏡に映じた神の自画像と解され、その美しき鏡像を前にした神は、自己の姿にうっとり酔いしれるナルシスと化す。

シラー自身に対しても、鏡の隠喩は深い安寧をもたらす。鏡の隠喩が高かざされそれが人に対して突きつけられることによって、人は鏡の裏側にまわる不遜を禁じられる。鏡像以外の異なる解説という神からの危険な逸脱が禁止され、神が無条件的に肯定されるべき権限と根拠が獲得される。つまり、鏡像とされることによって万物はそのまま無条件に是認される。意味解説すなわち鏡像以外の異なる解説や現状からの逸脱がもはやはいりうる余地のない静的な鏡像に映じた現実関係が、不動のものとして根拠づけられるというのである。革命を標榜する自由の使徒であらんとしたはずのシラーは、神へと絶対的に隷属しながら主体的に自由でもあり続けるための根拠を、鏡という隠喩的思考が行う手品によってアクロバチックに、あやしげながら手に入れることができたというのである。

『哲学書簡』のほんの数年前、彼は自分の神をまったく唯我論的に、まったく自己中心的な存在と考え、そして——もちろんそれ以外のやり方はいないが——それをメタファーで表現し、「私が考えるに、神は、何も知らずに神を讃える（最低次元の）虫けらを愛することがないのと同様に、（最上位の）熾天使を愛することもまたない。神が見ているのは、自己自身、無限なる自然の中にまき散らされている偉大で無限なる自己だけである。——神は、万物の諸力の総和の中に一刹那自己自身を見出す——神は創造物の全営みから、いわば鏡から反射した鏡像のように、自分自身の像をあますところなく見る。そしてそこに浮かび出る自己自身を、すなわちしるし Zeichen の中に描き出されたものを愛するのだ」と（シラーは）言う。ここ（シラー）ではまだ神だけがナルシスだが、少し経つと（ロマン派の詩人）ノヴァーリスは人間を（そのような）ナルシスとして提示することになる。

鏡は後ろ側から見ることはできない。それゆえしるし Zeichen と字母（アルファベットの文字）という（他の可能性を容認しない）メタファー態 Metaphorik は、人間が神の反射像 Reflexion をのぞ／き込む無遠慮な視線にはふさわしくない。（…）いずれにせよシラーのメタファー態が示しているのは、そのメタファー態がいかに煮え切らないものでは

あっても、ただ存在するだけで、「より高次の」ものへの隷属を必要としないもの、ほかならぬそれだけがあり、そして表出されている現実関係なのである。（『世界の読解可能性』、pp.233-234、stw, S.222. 下線、改頁の印／、括弧内の補足、独語補足は高橋、訳文は例によりかなり変更している。）

論理的には両立しえないはずの矛盾を、鏡や鏡像という非論理的な隠喩によってシラーは、強引にクリアしようとしていたのである。

それを煩瑣をいとわず言い換えてみると、こういうことであろうか。神の不可侵性は絶対的にまもらねばならない。だが、自由な改編のなされうる読解可能性（書物メタファー）すなわち書物を記す文字は神の絶対性を否定する。しかし、人は神の奴隷でこそあらねばならない。ところが、それは人間としての主体的自由を否定するものでもある。この二律背反に挟まれたシラーは、溺れる者が藁にもすがるかのように、鏡の隠喩（メタファー）というさして根拠のない比喩に手をのぼし、それを絶対的な必殺の切り札（絶対的隠喩）として急遽投入する。すると何と奇蹟が起きる。神の手になる現行の被造物以外の、自由な人間の手になる第2、第3の自律し独立した文字による恣意的な詩的美的世界への突入やその増殖を、まずは遮断し、もはや意味を問われることのありえない静的な鏡像の側にのみ自己を敬虔にひきとめる必然性の設定が可能となった。と同時に、「ただ存在するだけで、「より高次の」ものへの隷属を必要としないもの、ほかならぬそれだけがあり、そして表出されている現実関係」として、シラーその人の主体的な自由をもまた破壊しない、ないしは保証する。神ならぬ人間には、その鏡像の静的様態がもたらす非隷属的な自由という幻像に満足することもまた可能となったのである。神の絶対的支配と人の主体的な自由という途方にくれずにはいなかった深い矛盾も、あやしげな鏡面隠喩が投入され、都合よく解されたことによって、少なくともシラーにとってはまこと爽やかに雲散霧消したのである。

しかし、そのことは、ブルーメンベルクが引用していた書簡における火や円環等の絶対的隠喩の列挙が、結局のところ、シラーの世界観が引き裂かれていた読解可能性の消失要請（神への隷属）と、人間としての自由との間に走った致命的な亀裂を克服・修復するという肝要な点に関しては、全く意味をなしえなかったということでもある。シラーにとって転換点となり救世主となったのは、むしろ鏡の隠喩の方である。鏡面もまたある意味では世界読解のひとつであり、そこに書物という絶対的隠喩の存在を認めることもできなくはないからである。とはいえ、ブルーメンベルクによるその鏡の隠喩投入の仕方はやや唐突であり、やはり曖昧さがつきまとう。このように、第15章では、シラーにおいて、いかにも絶対的隠喩が言及されているかのような装いをとりながらも、読解可能性（書物）の隠喩が納得のいくかたちで機能しているとはいいがたく、その証明のやり方ないしはその明示の仕方にしても、どこか十分ではないように思われるのである。

だが、その鏡の隠喩にはさらに続きがあった。

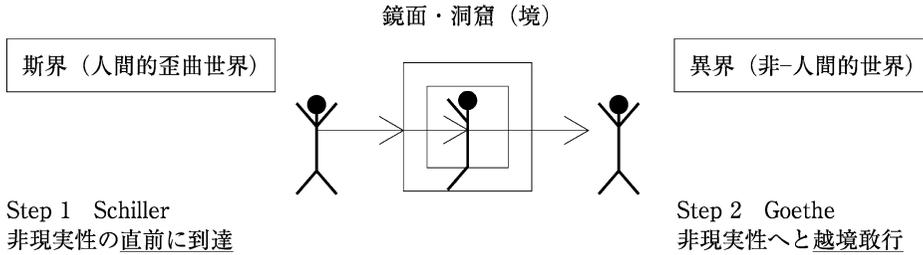
シラーにおいて導入されていた鏡の隠喩は、その同じ第15章でとりあげられるシラーの盟友ゲーテにあっては、洞窟くぐりに変奏されて、よりいっそう深い意味をもつことになるからである。鏡面に鏡像が静的に映り、その鏡像の静止性の絶対性にシラーは縋り安寧を見出したが、鏡像の比喩は、それにとどまらず、その静止像の彼方をも同時に暗示するものでもある。というのは、鏡や鏡像は、この世界と異世界との境界として、西洋においては繰り返し用いられている神話的な象徴のひとつだからである。鏡はきらめき、鏡の前に置かれたものや立つ人を映し返す、すなわちその人を今いるその世界に押し戻す。そこから、鏡はその先に踏みいることのできない異世界との閾象徴としてイメージされることになる。鏡像の向こうにあるのは、こちらの世界とは異なる異次元である。したがって、それをくぐるとは、世界の閾を超える、越境するということの意味する。そこから、シラーでは鏡像に託して語られていた異世界との境界入口が、ゲーテでは一步進んで、火成論等の論争をいわば韜晦としつつも、岩の裂け目や洞窟への沈降としてはっきりと論じられていくことになるのである。

鏡と洞窟というように異なる隠喩をもちいているのは、シラーとゲーテではその立ち位置に大きな違いがあったためでもある。閾、異世界との境界に立ちながらも、シラーは鏡像とは異なる解説をあえて自粛した。それは、神の与えた世界とは異なる解説という神への離反を自らに禁止したためである。けれども、そうした倫理的なシラーとは異なり、ゲーテは、神への節度と自粛などといった狭隘な倫理に繋縛かつ制限されることはない。それゆえ、鏡面の直前にまでやって来ながら鏡面の中に侵入することは踏みとどまった友人シラーとは対照的に、ゲーテはその鏡の中に入り込み、鏡面という境界を大胆に踏み越えていく。隠喩を変えて洞窟くぐりとして、つまり、異界への窓や扉である「割れ目や裂け目」(p.237、stw, S.225) 解説の姿勢、「理性の限界設定」となる臨界点、理性が無力となり「理性が果たすべきことがない」「地底や洞窟」を発見し、「この荒涼とした岩山の洞窟に深く潜りこん」でいく「イルメナウの経験」(以上はいずれも p.239、stw, S.227) として、それは語られていくのである。

洞窟もまた、「洞窟の比喩」のプラトン、オデュッセウス(『オデュッセイア』)や巫女シビュラに導かれてなされる英雄アエネアスにおける名高い冥府行(『アエネーイス』)以来、異界へと渡るための象徴的アイテムとして、西洋文学の中でほとんど常套的にもちいられてきたものである。その閾(鏡、鏡面、洞窟)をゲーテは越える。つまり、異なる隠喩や象徴で変奏されてはいるものの、ゲーテとシラーというドイツ古典派の双璧は、片や鏡面のこちら側に、片や鏡面の彼方、その裏面にと立っている。いわば鏡面(洞窟)という閾をはきんで、向かい合い対峙しているのである。

だが、その二人の鏡(洞窟・閾)に対する異なる反応は、二人の相反する考え方によるだけではない。異界に渡らんとする時、人はまず鏡(境界)の直前にたどり着き(Step 1)、その後、勇気とともにその鏡(境界)を越えて、彼方へと抜け出ていく(Step 2)。第15章におけるシラー

図6 シラーとゲーテにおける鏡面通過継起図



とゲーテについての考察は、そうした実際には連続する一連の行為を、鏡（闕）の両サイド、すなわち鏡の前と鏡の彼方とに分節して配置していた、と解することが可能だからである。ブルーメンベルクは、鏡（境）にたどりつく Step 1 と、その境を大胆に超えていく Step 2 とから構成されている劇的な越境行為を、連続する継起的な2つのコマとして、私たちの眼前に繰り広げて見せていたのである（図6）。

鏡（洞窟）を挟んだこうした一見奇怪な配置は、前述したように、西洋の文化や文学においてはそう奇異なものというわけではない。鏡の国のアリスは、鏡という境を抜けて異界に侵入する。20世紀のコクトーによる映画『オルフェ』（1949）で人が鏡から冥界にはいるのも、それと同じ論理からである。『夢十夜』等がそうであるように、夏目漱石の人物たちが、なぜか床屋に行く奇妙な傾向にあるのも、実は処刑力を連想させる長い剃刀、ギロチンの刃を連想させる鏡の四角形に加えて、鏡面という闕がそこに現前していたからである。処刑を受けてその境面をくぐり、異界へと踏み入る。さらに鏡面は、分身 Doppelgänger が鏡像として出現するところでもある。逆にいえば、分身が出現するところは、鏡面という世界の果てが現れた瞬間でもある。分身や鏡を描くゲーテやロマン派のホフマン、窓枠図像という形でこの世界の最果てである鏡面を繰り返して描く画家フリードリヒやロスコ等、鏡の帯びる境界性は、多様に変奏されながら頻出する。ブルーメンベルクがとりあげているシラーの鏡の隠喩とゲーテの洞窟の比喩にこめられていたものもまた、その西洋文化におなじみの境界性であったのである。

隠喩学の創始者ブルーメンベルクは、論理的思考が頓挫した亀裂と、それを修復すべく投入された隠喩とによって、思想家たちが置かれていた思考の苦しい実相が透視されうると考えたが、それと同じことは翻って、それをやっているブルーメンベルク自身にもあてはめることができるかもしれない。鏡という隠喩の威力を暴きだし、シラーたちがすがっていた隠喩の威力を解明しようとするブルーメンベルク本人のその入り組んだ奇妙な手つきのうちにも、私たちは、『世界の読解可能性』という謎めく著作にこめられていると考えられる真意を、逆に読み取ることができるようにも思えるからである。

隠喩としての鏡が、異質な領域の闕を象徴的に示唆しており、事実第15章においてその闕が越境されていた、とするならば、ゲーテはいずこへと越境していったのだろうか。いいかえれ

ば、ブルーメンベルクは、洞窟による鏡面越境をゲートに敢行させることによってシラーやゲートたちを一体どこへと越境させようとしていたのだろうか。表には可視化されないそうした越境劇をそこに洞察し配置しようとしたブルーメンベルクは、どこからどこへと西洋の思考を「空間移動」(ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』、北岡誠司、福田美智代訳、書肆風の薔薇、白馬書房、1987)させようとしていたのだろうか。

その真意は、小説の非現実性として、同じ第15章の中で明示される。シラーがその直前にまで行きながら受け入れることのできなかつた新しい考え方、すなわち鏡面の直前に立つところまではともかくも容認しえたものの、その先の鏡面の中へ、そして鏡面の彼方へと踏み入ることを拒んだ考え方、すなわち「読解可能なものが世界含有性 Welthaltigkeit に到達することもあり、つまりはそれ自身が「一つの世界」になるという美的な要求を持ちうるという考え」(p. 234、stw, S.222、独語補足は高橋)として提示される。私たちが生きているこの現実世界をまるごと含みこみ、しかもそれ自身が、この現実とは異なるひとつの自律した美的世界となりうるもの、ブルーメンベルクによれば、それが小説であり、そして小説はそのような本質からして非現実的である古代の〈叙事詩〉の、新しい近代的な形態であるとして規定される。小説が自身の自律性の具現化に向けて大きく前進し、自律した圏域へと離陸する時、〈叙事詩〉に天性そなわっていた非現実性は、その濃度を飛躍的に高め、最終的には人間性の抹消と空白の充満にいたってその極値形態が完成される。すなわち〈叙事詩〉とは、シラーがとどまりそのままに拝受しようと祈念した神の手になる現実世界の諸関係を、その現実とは微妙に異なる非現実的な次元(実は虚構的な鏡面世界)の中へと吸いあげる吸血的な鏡なのである。そして、現実から乖離しえたその非現実的な圏域は、最終的に宇宙ステーションのように空中に浮遊する亜空間となる。『オデュッセイア』等の叙事詩やその近代形態である小説とは、「現実関係の強度をすべて自らのもとに集めるためのジャンル」(p.234、stw, S.222、下線は高橋)であり、蛭のように現実にしつかりと密着しながら、現実を活かしている生々しいエキス(=強度)をバーチャルで非-人間的な関係性のネットワーク(宇宙ステーション的亜空間)の中へと、精力的に吸収していこうとする、おそろべき非-人間的な吸血装置であったのである。

それゆえ、シラーは、はからずも呼びだしてしまったその“鏡”という、非現実的な異世界との境界を前にして凝固し、かわってゲートがその彼方へと闕を大胆に超えていく。その洞窟くぐりという隠喩的行為に正確に対応するものとしてブルーメンベルクによって呈示されているのが、世界のすべてをバーチャルな圏域へと吸収しきうるゲートの「万有小説」なる壮大な構想の抱懐である。そうした非-人間的な系譜のとてつもない非-人間的な意志は、そのゲートから次の初期ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリスによるロマン(小説)のロマン化(非-人間化)という、現実からの乖離の極大化志向として継承されていく。シラーからゲートへと秘かに渡された現実を非現実化しようとする企図と意志は、駅伝のたすきのように、ノヴァーリス等の非現実的なメルヘン風ロマン(長編)の展開に手渡され、より強く遂行されていくことに

なる。

しかしながら、その虚構のネットワークの自律化は、現実の生身にそなわる人間性の剝奪過程でもある。非-人間化の達成と洞察 Einsichten に向けて人間的濃度が揮発化されていく、とそれは言いかえてもよい。そして、非-人間化へと向かうそのような駆遣は、ドイツの大博物学者アレクサンダー・フォン・フンボルト（第18章）やフランス唯美主義の詩人マラルメ（第19章）において顕現する現実空白化の極大化にいたるまで、揺るぎなく推し進められていく。

だが、シラーが直面した鏡面に、澄明な鏡像として静的に映しだされていたこの地上の世界そのものもまた、「私たちの周囲の全ては、この驚嘆すべき光のもとで鏡に映じた風であった。（…）全ては完全に肉体を剝奪されていた。」と、ウィーン世紀末の詩人ホフマンスタールがその形而上学的エッセイ『北アフリカの旅』の末尾に記しているように（『ホフマンスタール選集』第2巻、河出書房新社、1972、pp.407-408、小堀桂一郎訳）、実は、すでに親-人間的な現実の実質や濃度がある意味剝奪され、そのバーチャルな鏡面中に非現実的光景としてシュールに浮遊していたものである。

その非現実化への兆候は、したがって詩人シラーが鏡像に魅入られたその時、すでに胚種されていたものである。その隠れていた胚種を、吸血鬼の系譜として位置づけ、ブルーメンベルクが芽吹かせる。シラー、ゲーテ、ノヴァーリスという、『世界の読解可能性』において提示されたこれらドイツの詩人たちにおいて、鏡面と現実性の剝奪や現実からの乖離現象が彼ら3人にとって有していた意味、すなわち新次元への越境敢行という深い意味が、鏡面や洞窟くぐりという隠喩を投入したことによって、あるいはブルーメンベルクによって投入されたことによって初めて、駆遣されるべき共通項をもつ新しい秘密の系譜としてここに可視化され、そしてその隠喩が彼らを彼らたらしめる。してみると、たしかにシラーの鏡の比喩、ゲーテの洞窟の比喩は、秘密の系譜上にあったシラーとゲーテの2人にとって絶対的隠喩にほぼ等しい救済的な働きをしていた、ということではできるのかもしれない。

『世界の読解可能性』の中に明示されている5つの絶対的隠喩のうち、最後の絶対的隠喩言及がなされる第20章「夢解釈の準備」は、19世紀前半の哲学者ショーペンハウアーがフロイトに先立って夢解釈への萌芽を発見した経緯を論じている章である。それまでの古典的な夢解読法と、世紀転換期「ウィーン世紀末」におけるフロイトによる新しい夢解釈とは全く異なるものとして、両者の間には決定的な深い溝が走っている。その溝は、フロイトが、人間的なものに依拠していたそれまでの古き感性や考え方（近代）を、いわば多段式ロケットがその巨大な初段部分を切り離すように、切り棄てていった時に見えてきたものである。けれども、その溝を最初に創り出し、それと同時に、そのことによってこの現実領域から、近代の人間的な価値基準の彼方にあるやもしれぬ非-人間的な領域（夢）への架け橋を初めて作りだした人物は、ブルーメンベルクによるとショーペンハウアーであり、そして、その夢と現実という相反する異

領域間の溝を埋めるべくショーペンハウアーによって初めて導入された絶対的隠喩が、世界と夢との交換可能性であった、とされる。

古典的なタイプの夢解釈(…)は、ショーペンハウアーにとってまったくどうでも良いことである。というのも、主観は別の、自らの形而上学的「状況」を説明する関心を抱いているからであり、その関心にとって「ヒエログリフのアルファベットを解く鍵」は役に立たない。「それでも、これらの形象の選択と連続の仕方にはまったく意味がないわけではないという前提は、きわめてありそうな話ではある……」。ここに新しい種類の期待が結晶化する。

「もし未知のアルファベットで書かれた文書を発見したら、理解できる言葉や脈絡のある複雑複合文を形成す／る文字の意味を推測できるようになるまで、解釈につとめることになろう。しかし、解読が可能となってしまうと、その解読の正しさを疑う疑念は何ひとつ残らなくなってしまう……」。ところで、これでは(新しい未来の)夢解釈への糸口にはならない。これはむしろ、(旧来の)世界と夢の等価性の痕跡である。(だが、)等価性に自足してしまう旧来の性向は、(ショーペンハウアーにおいて発現した未来の夢解読を予言する)絶対的メタファー態 die absolute Metaphorik における交換可能性 Vertauschbarkeit においても同じく当てはまる。(というのも、)夢を読むことができるのなら、一そして夢が読めるということに単なる確信以上のものを持てるとしたら、一われわれはその夢もまた世界と同じように扱うことになってしまうからである。(事実、ショーペンハウアーは、)「世界の解読は、世界のあらゆるページを相互に関係させてまとめる一致によって自己自身の内部から確証されねばならず、このこと(世界のあらゆるページを相互に関係づけること)は(しかし)世界解読の仲介を経てのみ起こる」(と、トートロジーとして自己循環的に自足する言葉を語っている)。(『世界の読解可能性』、pp.356-357、stw, S.334、下線や括弧内補足、独語補足、改頁の印／は高橋)

すでに述べたように、1)人間がリアルに生き関わっている現実世界と、2)人間主体が関わりはしても決して制御することのできない非-人間的な夢の世界(「夢の作業」の狡猾な策動によって自我の制御を離れて多様にして混乱した夢内容の世界」p.357、stw, S.334、下線は高橋)とは、まったく異なる2つの領域である。もちろん、夢と現実との間に神意を人間側の願望に即して歪曲、介在させ、それを現実のカテゴリーの中に投影し、親-人間的に回収するといったデルフォイの神託に類した古典的な夢判断は、古今東西頻繁になされてきたものではある。とはいえ、めまぐるしい夢想の渦の中に、旧約のヨゼフでのような都合のいい夢解釈に類したある一定の連続性すなわち人間的な意味をもちこみ、人間的秩序を捏造することはきわめてむずかしい。人間的現実と非-人間的な夢領域とは、文字どおり異質なるものとしてあるからであ

る。

けれども、意志と表象との関係から世界を考えるショーペンハウアーにとって、「現実と夢が同じ「材料」から出来ているかもしれない」(p.354、stw. S.332)。人生は「「意志」の啓示としての書物」(p.355、stw. S.333)であり、「そこには、次の世紀に行われるような、遺伝子コードの想像的「読解」を先取りするような何かがある。」(p.355、stw. S.333)。「夢は、とぎれとぎれのものではあるが、有意味なものの構築物」(p.356、stw. S.334)なのである。とはいえ、従来の夢解釈ではその有意味性を解読することはできない。この難問を前にして、ショーペンハウアーは、それまで人間にとって連続性(すなわち秩序)あれかしとして祈願的に、捏造的に架けられていたかに見える危うい架け橋、すなわち夢の領域を人間の領域に我田引水的に引きこんで可能となった親-人間的な夢解釈を、まずはすべてきれいに取りはずす。その上で、現実世界と夢領域という本来異質である両領域がお互いに交換可能な何かであるとする奇矯かつ危険きわまりない発想に想到する(「新しい種類の期待が結晶化する。」。)古来の「世界と夢の等価性」に似てはいるが、しかし、夢もまた現実と同様に人間的に解読しようとするその親-人間的姿勢から離れ、人間的意味を与えてくれる橋をはずしてショーペンハウアーは、今や全く異質であることが明らかにされたその領域間に、今度は、夢も現実の事象もすべて水平的に並置され混在する交換可能性という絶対的隠喩を動員することによって、新しい非-人間的な未来を喚起し、その未来へと渡河しうる未聞の橋を架けようとする。ブルーメンベルクは、人間が人間のために読む夢解釈を覆すそうした破天荒の未来を、そうした「古いメタファーを今まで読まれたことがないもの(非-人間的意味)、これから読解可能にすべきものへの方向に向けて掘り下げる(ショーペンハウアーの)反発点」(p.359、stw. S.336、括弧内補足は高橋)のうちに見ようとするのである。

これは、ドイツ・ロマン派の怪奇作家 E. T. A. ホフマンが1810年代に行った夢の世界と現実世界との不条理なる接続の、ある意味異なるバージョンともいえなくもないが、ショーペンハウアーにおいてもホフマンにおいても、現実世界と夢世界との間に思いもかけない交換可能性という通路(洞窟)が開けた結果として、人間的な日常感覚からは明らかに乖離したバーチャル領域である夢次元(新異次元)を(=場の非-人間性)、これまた同じように人間的な歪曲から離脱して、自然や「現実の絶対主義」(自然)により強く即して解読しうるやもしれぬ、未踏で画期なる可能性が(=方法の非-人間性)、かすかにであれ、ここに垣間見えてきたのである。

人間は生命種として生きのびるために太古の昔から、諸事象を手を変え品を変えひたすら人間に有効なものへと変形する・撓めることを隠喩にすがって行ってきた。隠喩によるそうした親-人間的歪曲(撓めること)という秀抜な防御バリアがあったればこそ、人類はその外部にうごめく危険な自然(現実の絶対主義)からくる圧倒的な脅威を遮断し、人間に都合の良い方向へと制御する側面を徐々に強化していくことができたのである。いいかえれば、人間の文明や進化は、隠喩がなしえたその歪曲という足場(バリア)の上に築きあげられていった。それを

「人間的な、あまりにも人間的な」世界解説（書物メタファー）の歴史と呼びうるとするならば、その歪曲が消されていった先の白い空白のその彼方には、当然のこと、未知の領域、ショーペンハウアーの夢の世界において垣間見えてきた未踏の異界が遠望される。「人間的な、あまりにも人間的な」とは異なるという意味で“非-人間的な”天界に向けての巨大な転回劇の幕が、人間の視点という旧弊の軛と色眼鏡を取りはらい、交換可能性というとてつもない絶対的隠喩にすぎることによって、今ここについに切って落とされたのである。

しかしながら、そこにある交換可能性とは、ドゥルーズの平滑空間や純粹差異状況に直結する万象の水平的な等置、全きカオス（変態）の戦慄的な現前のことである。したがって、交換可能性というこの絶対的隠喩は、これまでの古代中世近代の洞察群（条里空間、同一化による諸秩序）を空白化して、その彼方の未来に潜在するのではと予感された非-人間的な世界解説を導きださうのかもしれない驚くべき装置として、ブルーメンベルクにより登場させられているということになる。その未来、その非-人間的な世界読解こそは世界の真相に極力正確に衝迫しう読解の可能性、すなわちブルーメンベルクが『世界の読解可能性』の序文で（真の）「洞察 Einsichten」（「そうなるかもしれない」p.vii, stw, S.3）と呼んでいたものである。だが、そのように考えていくなれば、ブルーメンベルクが生涯こだわっていたと思われるプラトンのあの「洞窟の比喩」、そしてその洞窟の彼方に当然のこと予感されているプラトンのイデア世界もまた、従来親-人間的に解されたイデアとは異なる相貌を帯びてあらわれてくる。プラトンのイデアに対するブルーメンベルクの異常に強いこだわりから見ても、イデアは、当初の親-人間的な方向に角を搦めて解されていた〔擬似イデア1〕から、文字通り非-人間的な宇宙の〔真なるイデア2〕として新たに蘇りうるもの、とブルーメンベルクの未来構想にあっては解されていたのかもしれないからである（cf. 図3のイデア2）。

ところで、夢と人間的現実との水平的な交換可能性とは、読解可能性（世界書物隠喩）そのものの水平化ともいいかえることができる。読解対象そのものが平滑空間化しつつあるといいかえてもよい。書物という絶対的隠喩が、ショーペンハウアーと西洋の思考を、新しい読解すなわち非-人間的な読解の地へとふんわりと渡しつつあった。とするならば、シラーの鏡の隠喩と同様、書物隠喩が表だって絶対的隠喩として現れているとは、なるほど見えにくいものの、実質的にはここ第20章においても、読解の新次元をめざすキックオフという意味で新しい書物隠喩すなわち世界の新読解可能性への萌芽が、夢と世界の「交換可能性」という絶対的隠喩としてショーペンハウアーにおいてもまた機能していたことになる。

もっとも、人の制御を大きく超えてしまっている危険な夢の氾濫や流入を謙虚に水平的に取りこむそうした交換可能性を、ブルーメンベルクの思惑どおりに「存在の根底に（おのずと）立てられ」てくる存在の楯的な問い（にして答え）といった絶対的隠喩として解しうるかといえば、むしろその逆であるのかもしれない。ショーペンハウアーに勧請されたこの新しい絶対的隠喩は、夢も現実をもすべてカオス的な差異群の荒波の中に水平的に埋もれさせるもので

あって、本来その差異群に対する恐怖から自然に「立てられ」てきた魔法の衝立（問いにして答え）なるバリア（防御壁）をこそ、まず第一に解体するものであったからである。それは、もはや旧来の読解を推進する救世主としてのあの絶対的隠喩ではなく、むしろ読解の歴史そのものの消失を推進するもののようにさえみえるのである。それゆえ、そのショーペンハウアーの新しい等価性、すなわち夢と世界との交換可能性という絶対的隠喩そのものもまた、旧来の等価性に劣らず親-人間的意味化へとずれこんでいく。世界の解読は、世界のあらゆるページの相互の関係づけに基づくといいつつも、その世界のあらゆるページ相互の関係づけそのものは、世界の解読に仲介されて起こる、というように、人間的な圏内で親-人間的に自己循環するにすぎない。世界への対応と同様に夢も処理されるとするならば、当然夢もまた親-人間的に自己循環するものとなるに違いない。その意味でショーペンハウアーにとっての絶対的隠喩もまた、彼の思考を危険な水平的交換可能性への全的開放から親-人間的な内向運動へと回収してくれる救済的相貌をやはり帯びている、ということができるのである。

4 著作の転換点第11章——パークリの絶対的隠喩 触覚

さて、わかりにくい著作の、わかりにくい絶対的隠喩の検証ということで、その考察の道筋もいささか入り組む結果となったかもしれない。とりあえずここで、ここまでの考察の結果を簡単にまとめてみることにしよう。

『世界の読解可能性』において絶対的隠喩は、第15章、第20章に一度ずつ登場していた。前者第15章（シラー、ゲーテ）の場合、いわゆる表向き絶対的隠喩とされているものが実際にはほとんど意味なく列挙されていただけであり、逆にそうとは一見みえない鏡の隠喩と洞窟（裂け目）の隠喩の方が、本来の絶対的隠喩の帯びうる救済的な役割をシラーとゲーテに対してはたしていた。絶対的隠喩といっても、つまり、ややずれがあるわけである。後者第20章（ショーペンハウアー）のケースでは、世界と夢との間の交換可能性が絶対的隠喩となり、人類にとって新次元を切り開く入り口をショーペンハウアーその人に救世的に切り開き、新旧の夢理論の間に亀裂を走らせるとともに、未来へと大きくジャンプさせるための先導的役割をはたしていた。いずれも、ストレートに書物隠喩であるとはいいがたいところがあるものの、鏡にしる交換可能性にしる水平化されたテキストの読解という意味では書物隠喩として機能していること、そして希望する次元への「空間移動」や充足（安全な自足）を魔法のように導いてみせていることとの2点から、一応絶対的隠喩の名にふさわしい働きをしていたということではできる。

このように、『世界の読解可能性』における2章2つの絶対的隠喩を具体的に検証してみると、第20章の絶対的隠喩がそうであったように、この著作での絶対的隠喩は、絶対的隠喩らしい働きをしているということではできるものの、その働きが顕著に示されていると思える第20章においてすら、ブルーメンベルクの筆は平易さからはほど遠く、読者が補足に補足を重ねた末によ

うやくにして文脈やつながりが見えてくる、といった非常にやっかいな代物になっている。

そうした理解の難しさは、絶対的隠喩がなぜか3つも大盤ぶるまいされている第11章ともなると、その大盤ぶるまいの度合いに比例して飛躍的に高まっていく。第11章では、西洋17世紀、視覚（や、それにもとづく延長空間と）を偏重的に重視した科学者デカルトに対抗して、その視覚を非直接性として貶め、触覚による神との直接性の方をこそ称揚した18世紀初期英国の思想家パークリの思考が論じられていく。

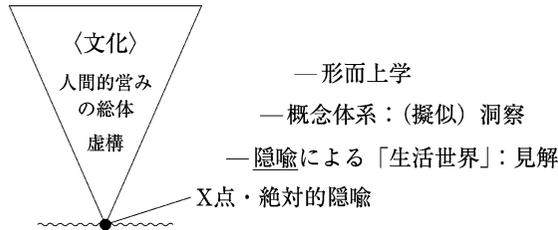
すでに述べたように、絶対的隠喩とは、論理的・理性的に根拠づけることのできない根拠、つまり無条件的に、それゆえ絶対的に是認され指定された究極の根拠なき根拠のことである。それがそこにあるべき論理的な根拠はないが、しかしそれと同時にそれはまたそこに是非とも配置されていなければならない謎めく必然性もまた濃厚に有している。なぜならば、それは、人間が脅威に満ちた危険さまわる自然・現実の中で生きのびるために絶対的に必要としているがために前提とせざるをえない無条件の根拠、生命に奉仕するべく捏造されざるをえない不可欠の根拠ともいうべきものであるからである。したがって、絶対的隠喩とは、論理によるものでも理性的に帰結した存在根拠でもなく、むしろその論理的思考や合理的な体系こそが窮地に陥り、非論理と非合理の奈落に転落し瓦解する危機的瞬間に、黄門様の印籠に類した問答無用の救世主として勧請され、事実、その祈りに応えて忽然と顕現する非合理にして合理でもありうる隠喩のことである。

ブルーメンベルクによれば、人は論理だけでは概念体系を作ることができない。社会構成主義等によって相対化されているとはいえ（cf. イアン・ハッキング『何が社会的に構成されるのか』出口康夫、久米暁訳、岩波書店、2006）、人は、生きるために、また生きのびるために、特定の共有された生きる理由や概念体系、つまり社会的なイデオロギーを非論理的にであれ、是非とも必要とする存在である。集団の生き物である人間は、ある特定の概念や観念を規範とし、論理や想像力によって構築される各時代各集団における概念体系に依拠しなければ、社会的集団の一員として生きていくことが非常に困難な存在である。ホップズのリヴァイアサンのように、概念体系すなわち「あまりに、あまりにも人間的な」社会構成デザインは、集団が生きのびるためのサバイバル特別仕様として選択され、かつ伝統として継承されていく人間的で理性的な夢想（願望）である。

けれども、そのような概念体系はそもそも何に基づいて、どこから、どのようにして選択され、構成されていったものなのだろうか。

いうまでもなく、「現実の絶対主義」すなわち非-人間的な自然は、変態一元の平滑空間であり、そのうちには、人間にとって有意義な〈文化〉の萌芽といえるようなものは存在していない。いわゆる〈文化〉とは、いかにその自然と親和的なものにみえようとも、畢竟、自然に抗って人間が創りだし反自然的に維持しようとしている人間の営みの総体であり（『神話づくり』）、

図7 自然の上に倒立する文化 cf.図1



自然・[現実の絶対主義]・変態

反自然的にアクロバチックに倒立して存立しているものである(図7)。そのような反自然、反「現実の絶対主義」である親-人間的な〈文化〉がどこかから、どのようにかして創り出されるとするならば、図7のように人の〈文化〉が非-人間的カオス領域と臨界的に接していると推論されるところ、自然との接点であると推定されるX点からに違いない。そして、そのX点が、ブルーメンベルクにおいて絶対的隠喩と命名されていたものである。しかしながら、それがX点であるとする、絶対的隠喩(=X点)の背後には、人を破滅させる危険が限りなく広がり、荒海のように荒れ狂っていることになる。絶対的隠喩とはつまり、みずから体を張って、自身の体をいわば存在の楯として、不条理や不確定性という非-人間的な大波が木の葉のようにあやうい〈文化〉という空中楼阁の内部へと荒々しく侵入することを必死に食い止めていた楯、〈文化〉という総体存在の最初にして最後の楯、いわば〈文化〉の最終根拠とでもいうべきものであることになる。

だが、そのX点は私たちの目には見えない。それどころか、〈文化〉の起点であるそれは、なぜか私たちの目にはほとんど隠されているといってもよい。見えない理由は簡単である。私たち人間にとって幸か不幸か、絶対的隠喩という名の衝立が存在すること、そしてそれが「立て(かけ)られ」ているその現場(X点)そのものが危険に満ち、いつ何時崩壊するやもしれぬ臨界点であるという戦慄的な事実こそは、私たちが何にもまして最も知りたくない当のものだからである。人は、自身が危機的状态に投げ込まれている事実を知ることを極力嫌い、何よりも安寧を強く求めようとする。人の存在を消滅させる確率の高さをもろに突きつけてくるそのような奈落や、それとの臨界点ほど、人々が最も見たくないものはない。そこに存在起点すなわち絶対的隠喩を隠蔽することへの強い必然性が生じてくるのである。

人にとって不可欠とされるその隠蔽は、ところで三重に行われる。なぜならば、ひとたび〈文化〉の起点Xを隠蔽しようとしはじめるや、隠蔽が自動的に次の3つのレベルにおいて遂行されなければ、隠蔽は中途半端に終わり、隠蔽すべき醜怪なる起点状況が露見してしまう危険性が伴うことになるからである。

- ①絶対的隠喩というその最も血なまぐさい第一の現場 (X点)
- ②概念体系が、“根の国”(基底隠喩銀河系)と「生活世界」において育まれた諸見解に基づいて構築されているという、忌まわしき実相である第二の現場
- ③思想家の栄光輝く概念体系の内に致命的に走る亀裂が、絶対的隠喩によって瞬時に非論理的に修復される第三の現場

①絶対的隠喩と③絶対的隠喩とは実は同じものである。しかし、人類や共同体の存立を無条件に絶対的に保証し庇護する根拠なき根拠は、個人の思想家の域をこえて妥当するものであり、思想家個人の営みとしての③絶対的隠喩とは、とりあえず異なるカテゴリーにあるべきものとして考える必要がある。それゆえ、私たちが依拠する共通の根拠なき存在根拠となるものが、①X点としての絶対的隠喩であるとすると、あやしげな根拠でしかない絶対的隠喩の存在は隠されるべき忌まわしきものの第一であることは、いうまでもない。だが、隠蔽の射程はそれだけにとどまらない。①絶対的隠喩とは、②“根の国”や「生活世界」を庇護し、また庇護することでそれら“根の国”と「生活世界」の産出を可能ならしめているものでもある。ところが、それらが礎となって論理的体系(イデオロギー)を創りだす。論理的であるはずの概念体系が拠って立つ足場が、欲望とそれに呼応して姿を変容させる多くの隠喩で複雑にもつれあっている非論理的な薄闇であるという疚しい事実もまた、明快な論理体系として掲げられ人々がそれに従うことが強く期待されている社会や共同体としては、是非とも隠しておきたい領域や思考現場の筆頭格である。

だが、事態はさらにもつれる。その論理体系を時代のイデオロギーとして構築する重い任を担っているのが、各思想家たちである。③その各思想家たちの概念体系や精神内部に走る亀裂を非論理的に瞬時に糊塗し修復してみせる各絶対的隠喩の存在は、思想家にとっての恥部や体系にとってのアキレス腱として、何にもまして忘却され隠されなくてはならないものである。かくして隠蔽は、少なくともこのような①～③の3つの現場で遂行されることとなる。そして、それら3つのレベル、とりわけ先にあげた①非-人間的なカオス(現実の絶対主義)に直面する第一の現場と、③「人間的な、あまりにも人間的な」概念体系を志向する各思想家たちにとっての第三の現場とは重なるところが大であるため、実際の隠喩は多重化して複雑にもつれあい、その結果、それもまた、ブルーメンベルクの隠喩に対する私たちの理解をことさらに難しくしているものとなっているようである。

ブルーメンベルクが行うパークリの思考メカニズム解明の方略や手つきもまた、その素材自体の隠蔽模様の複雑さに応じて、複雑に屈折する。第11章は、ガリレオやデカルトを引き継いだニュートンと、それを否定しようとするパークリによる対決、そしてその両者の隠れた協働を暴露するものである⁸。近代科学の推進者ニュートンにとって絶対的隠喩は「空間」としてあ

らわれていた。無限の主体である神と有限なる主体でしかない人間との間に横たわる恐怖の亀裂でもある無限大の距離、その恐怖の奈落が、「空間」という比喩をもちいて修辭的に表現されると、戦慄であった神との距離も難なく架橋され、無限の奈落もふんわりと飛び越えられていく。限りない恐怖の奈落とは逆に、他ならぬ人間の手による算定・操作の可能な楽しいイメージ世界（延長空間）が、それによって目の前に増殖されていくことになったからである。それまでは神との間に開いているのでは、と戦々恐々感じられてきた絶望的な乖離が、その「空間」という藪の内部に自閉した比喩表現によって、科学的計算への願望と安寧のみが満ちあふれる一定の、定量の場へとすり替えられ、以後そこは人間たちの、科学者たちの安寧の満ちる至福の地となったのである。

空間 Raum は、ニュートンが神の感覚中枢として以来、そのような直接性の最も強力なライバルとなった。経験の基本概念にとつての絶対的な基礎として、空間は、無限の主体（＝神）と有限の主体（＝人間）の間に横たわる（危険な否定的）距離 Distanz に対しても（それをイメージ的に肯定的なものへとすり替える）絶対的メタファーを提供している。（『世界の読解可能性』、p.159、stw, S.155、下線と括弧内補足、独語補足は高橋）

だが、隠喩によるすり替えや飛躍がなされたと同じその瞬間、「空間」隠喩の導入以前に満ちていた恐怖と実相を隠蔽しようとするお決まりの動きもまた、即走りだす。隠喩（イメージ）によって非-人間的恐怖光景の人間的封印が達成されえた瞬間は、つまり不思議にも人が忘却の河レテの水を喉をならして飲み、絶対的隠喩が救済した瞬間は、いうまでもなく、その隠蔽がなされていた事実をすらみごと自然体で忘れていくことのできる至福の記憶喪失の時でもあった。人は、恐怖と非論理的基盤という実相を「ブラックボックス」へと密封・隠蔽し、さわやかに忘却するのである（ブルーノ・ラトゥール『科学が作られるとき：人類学的考察』川崎勝、高田紀代志訳、産業図書、1999）。隠蔽と忘却は、その出勤の時を虎視眈々と狙い、まさに神出鬼没の自在さで出現するのである。

さて、18世紀初頭の観念論者バークリは、そのデカルトやニュートンたちの近代科学の「空間」概念に対して、触覚による神との直接的-一体性、直接性を突きつけ、厳しく対決しようとした。

バークリはそうした形の空間概念を消去する。人間が空間概念と幾何学を持つことができ

8 関係するバークリの著作を挙げておく。

ジョージ・バークリ『ハイラスとフィロナスの三つの対話』戸田剛文訳、岩波文庫、2008

ジョージ・バークリ『人知原理論』大槻春彦訳、岩波文庫、岩波書店、1958

ジョージ・バークリ『視覚新論』下條信輔、一ノ瀬正樹、植村恒一郎訳、鳥居修晃解説、勁草書房、1990

るのは、人間が（視覚で）見る・観照する存在だからではなく、意志的な存在であり意志によつて手を伸ばし、触覚において刺激を受ける運動を行う存在だからである。しかし、人が空間概念と幾何学を持っている事実から、人間が認識の価値を計る尺度をもっているとする、すなわち正確さを求める死に物狂いの努力を行ってきたためであるとするのは、知性になしうる領域からの悪魔的な逸脱のように思える。空間は（繭のような）自己保存の次元なのであって、（そのような計算努力による）自己実現の次元ではない。諸観念 Ideen は簡単に手が伸ばせるものとして精神の前にあり、（手で触れられたそのものとして）精神に読み取られる abgelesen ことだけを予期している。諸観念自身の彼方にまだ何か別のものが含まれているかのように「落ち穂のように後から拾い集める読解がなされる」nachgelesen 等ということは目されていないのである。（『世界の読解可能性』、pp.159-160、stw, S.155、下線と改頁の印／、独語補足、括弧内補足は高橋）

だが、先ほど「空間」という絶対的隠喩が人を包みこむ繭となって、無限の主体である神と有限なる自己との間の絶望的な乖離という思想上及び信仰上の危機状況からニュートンたちを救済したように、第11章の中心主題として俎上に載せられ解析されるパークリにおいても、無限なる神と有限なる自己主体との間には、やはり底なしの亀裂がぼっかりと開いていた。その底なしの亀裂に架橋し、その恐怖の奈落を隠蔽しうる万能装置として、ただし今度は、先ほどの視覚的空間とは全く異なる触覚が、絶対的隠喩として導きいられる。

目が見える人間がしているのは、空間の中で（触覚経験と）同時に彼に提示される展望 Übersicht をば、（実際に）可能な触覚経験の位置を確定するために（のみ）利用するだけである。（触覚のみがなしうるはずの）純粋な現前性が、（後に触覚により確認されることになる事態を、視覚ならば先取的に眼前の彼方に遠望するという）一時しのぎ的な予言効果を根拠にして、（デカルト的空間の）膨張（延長）Dilatation にすり替えられていく事態は、（視覚という）限定された明らかに「低次の」感覚能力のレベルで生じることである。（…）目が見える者にとって、言明と確認との非同時性（離れた事物を見ること＝言明と、その事物に近づき実際に触覚的に確認することとの間の時間的ずれ）は、（対象を直接認知できない視覚に随伴する）欠陥を補うための（やむなくの）代償にすぎない。欠落しているもの（＝視覚、すなわち空間というものに固有の非真正性や、世界認識における無能性）を、（延長空間を絶対化したデカルトのように）経験の最高の効率だとみなすような（誤った）すり替えをしてしまうと、神の純粋な現前性と一体化するという、（本来）経験に課せられている内密の使命 Bestimmung を見すごさせることになる。（Die Lesbarkeit der Welt, stw, S.160. cf. 『世界の読解可能性』、pp.164-165、下線、独語補足、括弧内補足は高橋、訳文は他箇所引用同様ここでもかなりの程度変更している。）

視覚に拠る限り人は、他者や神から常に乖離した悲惨な疎外された存在でしかありえない。それゆえ、パークリは、視覚の疎外や不能性に対して、対象と直接に触れることができる触覚を対置させる。触覚による神（他者、対象）との直接的合一によって、視覚にとりついていたあの不能性をふりはらうのである。しかし、それでことがすべて決したわけではない。その触覚にも実際には限界があり、それを克服するために視覚と触覚は屈折した関係を結び、不可分の相補的關係を起動させずにはいなかったからである。

（だが、ここに）意識の能力をあらゆる絶対的メタファーとして、触覚が投入されるやいなや、（その経験において、人は神と一体化するという直接性・）内密性がこじ開けられ入手される。（だが、触覚投入の波及効果はそれだけではない。）触覚は、内部と外部という（分別）図式を作りだし、この図式が（本来はカオス状態なため、内外の分別ができないはずの）視覚認知にも波及していつて、（内なる）精神の外部に「実存する」世界（を網羅し見晴らし各事象を位置づける）の索引という（触覚が喉から手が出るほど欲しい）役割を（すなわち、最高位の触覚に奉仕する下請けの任を）、視覚全体に担わせることになる。（stw, S.160. cf. 『世界の読解可能性』、pp.164-165、下線、括弧内の補足は高橋）

例によって何ともわかりにくい表現であるが、噛みくだいていえば、つまりこういうことであろうか。天敵にも似て一見対立する関係にある触覚と視覚には、それぞれ難点がある。触覚は一見、神や外部存在を直接的に認識することはできるが、それが触れられるものは畢竟限らない神や外界のごくわずかの一断片でしかなく、神という無限の主体やそれが創り出した世界を、その総体において認識しうるかとなると、それはもちろん論外でしかない。触覚の切り札である直接性のすばらしさがパークリによっていかに喧伝されようとも、所詮はある狭い断片内でのこと、井の中の蛙程度のことにすぎず、無限総体である神からは絶望的に切り離されているという致命的な難点を変えることはできない。触覚という絶対的隠喩を投入してみても、人は、神からの絶望的な乖離と孤絶のうちに依然放りだされたままでしかなかったのである（一）。

では、それに対する視覚の方はどうかというと、認識の直接性を有しえないというその致命的な欠陥に加えて、世界認識に関しても視覚は徹底的に不能であった。視覚には、実は世界が見えなかったからである。なるほど視覚には、見る人から離れた場所にある事物を見る、遠望することができる。他者との直接的な接触を行う原初的な味覚や触覚とは異なり、対象との非接触性や、そこから帰結する遠望性に視覚の特異性がある。いいかえれば、対象に触れずとも安全にそれを認識することができる。そこに進化における視覚の絶対的優位性があった。人間の感覚に関わる脳内情報処理の比率において視覚のそれが圧倒的な高さを誇るといわれているのも、すべてはその栄光ある非接触性のゆえにである。

だが、自明のように思っていた視覚体験の常識を解体して、実態へと究められていくと、そこに現出してくるのは、結局ターナーや、セザンヌ、スーラ等が19世紀末に逢着した、茫漠たる無限拡散や万華鏡的にきらめくカオスにほかならない。現代の脳科学が解明した視覚の驚くべきメカニズムを正確に予言していたかのように（cf. ロバート・カーソン『46年目の光：視力を取り戻した男の奇跡の人生』池村千秋訳、NTT出版、2009。スティーブン・ピンカー『心の仕組み～人間関係にどう関わるか中』NHK ブックス、棕田直子、山下篤子訳、NHK出版、2003、第四章）、パークリは、視覚のしている光景を、ドゥルーズのいう平滑空間の極致にも似た、意味や秩序のないすなわち輪郭のない、逆に変態のみが一元的に生起している万華鏡的なカオス状態として捉えているのである（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー 資本主義と分裂症』宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳、河出書房新社、2000、第14章）。それゆえ、その万華鏡状態は、『世界の読解可能性』第11章において「印象主義」と命名される。無数の点が無限に散乱する渾沌には確たる形態は存在しえず、また視覚そのものにも、そうした万華鏡のカオス状態から、凹凸や幾何学的等の明確な形態を創りだし、特定の意味を賦与することによって一定の秩序を醸成し産出していく形成力はない。対象認識に関して、視覚は徹底的に不能なのである。

「そもそも視覚能力によって知覚されるもののすべては、さまざまに変化し、光と陰のさまざまな関係に彩られた色彩である。しかし視覚のあの直接の対象は絶え間なく変化し、流動的であるため、これらを幾何学的図形のように制御するのは不可能である。……われわれがそもそも見ているものは立体でもなく、またさまざまに色づけられた平面なのでもない。それは色彩の多様性にすぎない」。このような「印象主義」Impressionismus は、世界が思い通りにならないということ、(感受する人間の眼前に世界の事象は歪みなく呈示されてはいるものの、)世界は扱いにくいという事態に正確に対応しているものである。これは世界に対する神の留保の究極の形式であるが、同時に世界の「美的」享受を世に解き放つのである。（同、p.165、stw, S.160、中略の印……は原文、下線と独語補足、括弧内補足は高橋）

では、視覚はどのようにして事象を見ることができるようになるのだろうか。触覚に天性具わっている内外を区別する分節の力学にすぎることによってである。対象識別に不能な視覚に、触覚の優れた内外分節能力が投入されることによって初めて、視覚は、いわゆる光景を輪郭あるものとして見ることのできる、私たちにもおなじみの視覚として立ちあがり、空間光景を初めて可視的なものへと変貌させるのである。

5 美の乖離世界がはじまる

問題はその先である。触覚の力によってなされた視覚の救済は、翻ってさらに触覚そのものにもフィードバックされる。

すでにのべたように、触覚は、神やその世界との直接体験に優れてはいるものの、結局は主体の手か足が直接触れうるある一部の有限的断片内に妥当しうる程度にとどまり、無限なる神という主体と、有限な自己というその主体（人間）との間には、依然として恐怖の間隙が限りなく広がっている。触覚には、困ったことに世界の総体を見わたすことができないのである。人は、恐怖の大自然の中に投げだされている。触覚は世界について無知であり、断片として孤独と無力さに呪われている。視覚に依拠したニュートンたちが神との乖離や距離に感じていたあの恐怖という点では、触覚においても事情はそう異なるものではなかったのである。それどころか、ニュートンたちがすがった「空間」隠喩の絶対化という救世主（絶対的隠喩）をさえ否定し消去してしまっていたパークリにあっては、縋りうるものがもはやどこにもなくなってしまっただけに、人が晒される恐怖はよりいっそう際立つことになる。

触覚の陥ったその第2のやっかいな思考の危機の瞬間、触覚というパークリにとっての絶対的隠喩が、千両役者となってふたたび花道に勇姿をみせる。触覚によるあの分節力学が視覚にも分与・恵与されるや、視覚が得意としていた外部世界への全体眺望という、触覚に決定的に欠けていた機能が、覚醒した視覚からその触覚へとフィードバックされる。視覚が行う遠近法的鳥瞰、全体眺望が、触覚にも棚ぼた的に贈与されていったのである。下位なる視覚による触覚の弱点の補填という屈辱的な事実も、上位概念である触覚が下位概念の視覚をまずは救済し、その後その恵与の波が触覚そのものに還ってきたと解しうるうれしい構図をもちうることによって爽やかに釈明される。優位性は明らかに触覚の方であったからである。

かくして、精神の外にある世界が視覚によって眺望され（触覚による）、その細目が網羅され、利用可能な索引として並べられ展望される（視覚による）。触覚と視覚とが秘かに手を繋ぐことによって、無限世界との断絶が、とりあえずは克服されていったのである。

触覚という絶対的隠喩が、パークリでは、①神（他者・世界）との非接触性を克服しただけではなく、②それが息を吹きこんだ視覚（空間認識）の助力を仰ぐかたちで、神との空隙という触覚自身にとりつく亀裂を蔽いかくす効力を発揮している。非直接性のゆえに視覚には広大な遠近法的眺望が可能であり、その視覚の鳥瞰力が迂回路を経てではあるものの、眺望不能という触覚の弱点をそっと補填する。つまり、絶対的隠喩（触覚）は、二重の意味で救世的的切り札として、パークリの思索を脅かす自己亀裂をめたくも修復してくれたのである。

視覚と触覚の入りくんだこうした相補的關係の成立により、分節なき万華鏡のカオス（即ち視覚）から一転、意味と秩序が産出される。パークリが、天敵であるはずのデカルトやニュートン等と協働することで、「人間的な、あまりにも人間的な」秩序化がここでも走りだしはじめ

る。途絶えかけたかと思えた思考体系構築の可能性が、触覚という絶対的隠喩によって二重の意味で修復されていたのである。

だが、絶対的隠喩によるそうした二重の修復作業とは、パークリにおいて明らかにされたはずの二重の不確定性を、もう一度ブラックボックスと化し、人々の眼から見えなくしていく隠蔽の営みでもあった。パークリが、デカルトやニュートンの視覚秩序・延長空間を過激に破壊したことによって露出させてしまっていた次の2つの実相が、視覚の不確定性を暴きだしたその同じパークリの手によって、今ふたたび、人間的秩序という幻惑のふ厚きペールをかけられ、隠蔽されていくことを、その二重の修復作業は意味していたからである。

- 1) 視覚に本来的なカオスの差異群光景（万華鏡的印象主義状態）という世界の第1の実相（世界との溝）
- 2) 触覚の悲しき宿命でもある断片性や絶対的孤立、すなわち世界認識に対する無知や不能、世界への不可知性という第2の実相（視覚と触覚との溝）

触覚の力を強調したはよいものの、それにより世界の不可知性や不確定性のひしめくパンドラの箱を囚わずも開けてしまい、自身も断片性と不確定性の窮地に陥ってしまったパークリは、その危地から逃れるために、天敵であるはずの視覚との協働へと絶対的隠喩（触覚）を導くことで、亀裂をたくみに修復し、不確定性のさらなる噴出や乱入を食い止める。触覚という絶対的隠喩は、当初の望みどおり1) 視覚そのもののカオス化危機（第1の実相と危機）を克服した上で、次に2) 触覚それ自身のより切実な不能化危機（第2の危機）からの救済を願って、二重に投入されていたのである。だが、その投入は、ブルーメンベルクの『世界の読解可能性』の内在論理がたどるベクトルに対する変節、そこからの逸脱でもあった。

『世界の読解可能性』は、読解可能性すなわち書物メタファーの歴史を通時的に追尾するという外観をとり、内在論理的には、「人間的な、あまりにも人間的な」読解可能性の生成とその空転とを叙述するという全体構成をとっているものである。著作の前半部分Iには、人間的な意味づけの深まりゆくプロセスが扱われ、著作後半IIでは、反対にそうした人間的な意味づけ（読解可能性）が徐々に解体され、ついには万事が空転し白紙化され、その彼方に非-人間的な意味での新しいオルタナティブな（異なる）読解可能性が浮上してくるプロセスがたどられていく。全体としては、【人間化／非-人間化（＝脱人間的読解）】という一種のシンメトリー（対称的）構成がとられているのである（図8）。

人間化、正確には隠喩（＝虚構）の力を借りた人間的な歪曲的認識への深まりは、ここに記したブルーメンベルクにおいては、サバイバルすべき生物種のひとつである現生人類にとって不可欠で必然的なものとして当然のことは是認されている（『神話づくり』）。とってしかし、そ

図8 『世界の読解可能性』の対称性構成

I 前半	II 後半
天 ↓ 地	人間 ↑ 宇宙
人間的意味化の深化プロセス	人間的意味化の空白化プロセス
人間的な、あまりにも人間的な世界書物の読解可能性の追求	人間的な、あまりにも人間的な世界書物の読解可能性の空転

のことが必ずしも全的に肯定されたというわけではない。というのも、人間化とは、「現実の絶対主義」（＝自然）の脅威と恐怖のまっただ中で何とか生きのびようとしてきた人間に都合の良いように撓められた認識や、それに基づく意味化ということであり、そのため洞察や認識といっても、“人間にとって”という限定付きでのみ妥当するものでしかない。

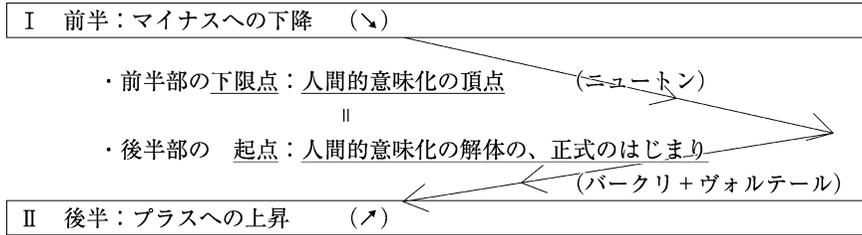
II後半部なすその人間的意味化解体のプロセスは、したがって、意味化行為の徹底的な不能化、つまりは世界解読を悉く空白化していく思惟系譜の、複雑な屈曲経緯を通時的に展覧するもの、そして非-人間化へと馬首を回頭したきわめて危険な歩みの深まりとなる。それは、人がそのはるか昔に隠喩がめぐらす人間的バリア（精神を包みこむ繭）により距離をとって以来、極力回避してきた大自然、あの「現実の絶対主義」への、何と回帰への試みでもある。なぜならば、親-人間的な歪曲を解体し消尽させようとするそうした歩みは、その果てに訪れる白い空無の彼方に垣間見える、非-人間的ではあれ、より普遍的かもしれない洞察 Einsichten への、想像を超えた前庭となりうるものだからである。ブルーメンベルクは、その非-人間化を肯定的な予覚として、プラスの最終目標として設定し、著作全体を構成しているのである。かくして、その [I前半/II後半] は、

- I 前半がマイナスへの下降（∨）として
- II 後半は プラスへの上昇（∧）として

対称的に編成されることになる。全体がV字状のプロセスとして構成されるのである。そして、問題のこの第11章あるいはパークリは、そのV字状のシンメトリー図形・軌道の転換点、すなわち否定的な領域（－）へとひたすら下降しゆく前半部の下限点として、まず第1に人間的意味化の頂点をなすとともに（ニュートン）、第2に後半部に推進されていく人間的意味化の解体の正式のはじまりと、そのことへの意識的認知とを明らかにキックオフするものとなっている（パークリ+ヴォルテール）（図9）。

ところで、図8や図9のように、不確定性の拡大と、それがもたらす親-人間的秩序の崩壊が、ブルーメンベルクにおいては、世界の読解可能性の最終的帰結として遠望されているとするならば、ここ第11章でなされたパークリにおける二重の亀裂修復行為は、不確定性というパンド

図9 扇の要となる第11章



ラの箱を開いてはみたものの、その危険度におののきあわてて閉ざそうとした行為、すなわち不確定性の噴出を食い止め、もう一度それを確定性へと変換しようとした操作といえる。不確定性の全開を志向するベクトルをよとするブルーメンベルクの理解からすれば、それは明らかに一種の変節である。そして、そのような不確定性の隠蔽という変節へと急遽走ることによって、バークリが思想史上に占めるべき意味もまた二つに分裂し、二重化するという新たな問題が発生することとなった。

バークリは、後半の（つまりはブルーメンベルクの真意に添った）空白化という上昇に向けての大なるキックオフ（始動）を行いながら、その同じ瞬間に、それがもたらすあまりにも危険な結果に怯え、そのキックそのもの（触覚による視覚秩序の解体、すなわち不確定性の実質的放流）の抑止とそのことの隠蔽へと轉身する。バークリにおける触覚による視覚の無能力露呈と、それに伴う万象の不可知という戦慄的事態の露呈と、その後の、触覚と視覚の協働によるそうした危険な事態の改めての隠蔽と抑圧とは、要するにこの著作『世界の読解可能性』が秘かに志向していた空白化の系譜を正式に認知する積極的な一歩であったとともに(+)、それに基づく空白や空転の勧請という、この第11章から著作末尾の第22章まで著作後半の中で徐々にあらわにされてくるメインテーマからは大きくはずれ、むしろデカルトの方へと後退することを意味していた(-)。

触覚によって一度あからさまに開かれてしまったパンドラの箱（不可知と差異群の氾濫）は、しかし、パンドラ神話と同様に、もはや二度と押し戻し封印し直すことのできないものである（cf. ドゥルーズ『差異と反復』河出書房新社、1994、p.279）。それゆえ、不可知や不確定性の無限散乱というこの非-人間化の呪いの拡散を防ぐべく、非力な触覚をベースにした新たな方式が考案される。それが、バークリの絶対的隠喩（触覚）において図らずも導入されることとなったあの視覚と触覚との協働や折衷、すなわち非直接性（対象との距離・障害）と直接性（神・世界対象との一致）との折衷である。その折衷は、①ニュートンの空間（非直接性・距離）と、それに敵対した②バークリの触覚という相反する二つの絶対的隠喩、すなわち①〔空間・非直接性〕と②〔触覚・直接性〕との正反合的な融合や統合という苦渋の形で具体化される。ところが、その方式が一旦発見されるや、その新形態はより世俗的な形をとって次世代に踏襲され

ていくことになる。世界認識に登場したその新形態が、第11章末尾にほとんど脈絡なしに、文字どおり唐突に言及されることになる第11章第3の絶対的隠喩、「印象主義」（美的作用連関）という名のヴォルテールにおける絶対的隠喩である。

バークリが言葉通りに受け止めてもらいたいと思っていたこと、すなわち神の「思考」に直接通じるものとしての自然観照の印象主義は、ヴォルテールにおいては、作家と読者との間に生じる「美的」作用連関 *der ästhetische Wirkungszusammenhang* を示す絶対的メタファーとなる。「この美的作用連関に必要なのは、光がやすやすと目の中に入りこみ、それゆえにほとんど気づかれることがないということである」とヴォルテールは言う——そしてこの作家の場合、光のメタファーは偶然ではなく、「作家の思考は、光がわれわれの目に入るように、楽々と苦勞なくわれわれの心に入り込まなければならない。そしてメタファーは対象を包み込むが、同時にそれを見せるガラスのようなものでなければならない」のである。（ヴォルテールによって）不可避的な条件として想定されたこの（光の）メタファーの（「光がやすやすと目の中に入りこみ、それゆえにほとんど気づかれることがないということ」という）その機能が、（この文脈において）示唆するところは大きい。（というのも、）それ（透明な光学的な侵入機能）は、メタファーの光学の直接性には入って行かないが、しかしその「障害」は陳列ガラスにまで最少化される——この陳列ガラスは、バークリに遡って考えれば、事物との接触を妨げはするが、と同時にこの事物を観察する価値のある展示物として顕彰することになるからである。（『世界の読解可能性』、pp.165-166、stw, S.161、太字・傍点は原文。下線、独語補足、括弧内補足、改頁の印／は高橋による）

陳列ガラスのケース内に飾られている、とここでいわれている対象は、バークリであれば神や神の造りし自然であり、ヴォルテールであれば、卓越した著者本人から知的にははるかに劣る読者たちにむけて神意のように発信された気高き啓蒙的意図、つまり最も伝えたい真意、人々によって最も直接的に一体化し獲得したいと願われているもののことである。だが、バークリによってパンドラの箱（＝不確定性の氾濫）が開かれてしまった今、他ならぬその強く希求されているはずの神や著者との十全な一体化への道は遮蔽され、それとのコミュニケーションは不能化する。その遮蔽と不能性が、上の例ではガラス製のケースという物的障害として具示されているのである。では、遮蔽が透明なガラスのケースとして表現されているのはどうしてなのだろうか。だが、ニュートンとバークリという対照的な二人の絶対的隠喩を次のように対比してみるならば、その問いに対する答えもほとんど自動的に導きだされる。

図10 第11章の3つの絶対的隠喩比較

①ニュートン	神との乖離	無限の距離	空間という絶対的隠喩で解消	正
vs				
②パークリ	神との乖離	無限の距離	触覚という絶対的隠喩で解消	反
③ヴォルテール ①②の統合	読者との乖離	大きな距離	印象主義(美的作用連関)という 絶対的隠喩により限定的に解消	合

(－) → (＋) 透明な光・障害の極小化

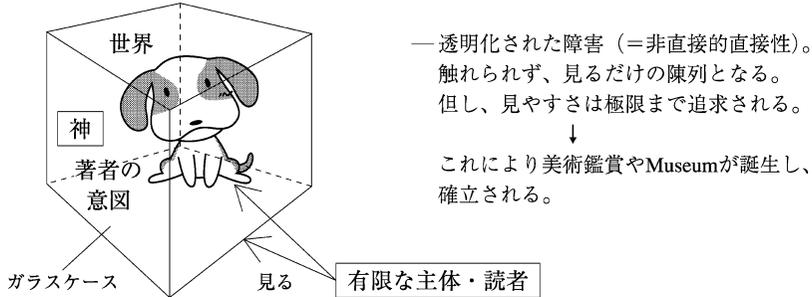
①ニュートンでは、神と人との間に無限の空間が広がっていて、障害は極大であり、視覚は、神という志向する対象には非直接的にしか対することができない。
その障害の存在は、中が透視できない分厚い鉛の容器に例えられうる（非直接性）。

②パークリでは、神と人との間に障害はなく、両者は直接に合一しうる。
触れられた断片性の狭い枠内に限定した限りでは、両者（神と人）間に、両者を隔てるもの、例えば鉛その他のケースに類した遮蔽物は存在しない（断片的直接性）。

触覚第2の実相と危機（断片化による孤絶）を解消するために、視覚と触覚とが協働して折衷的に融合する時（パークリ）、①前者ニュートン（視覚）の非直接性は、直接性の方へと半ばずれていく。逆にまた②後者パークリ（触覚）の直接性の方もまた、非直接性の極へとこれまたずれていくと、その結果として、非直接性的直接性、すなわち①非直接性的な（視線を遮断する容器・ケース）②直接性（透明なガラスや透過しうる光）という、相反する二重性を併有・折衷した奇妙な融合体③がそこに誕生する（図10）。

パークリでは第2の危機に対して講じられた窮余の一策であったこの視覚と触覚の絶妙な折衷は、その次世代の③ヴォルテールともなると、もはやたまたまに成立したというような偶然的性格からさらに進んで、近代に必然的な文化形態として確立されていくことになる。なぜならば、①ニュートンの「空間」の特徴である、視線が投射されるだけで、対象との直接的な接触は成立しない極度の非直接性や、②パークリにおけるような神との合一といった、中間の媒介となる障害（ケース）が完全に消去されるといった極度の直接性はもはや対象認識としてありえないとしても、確かに接触の禁止、不可触という遮蔽・障害はある程度残存するものの、対象への接近をばむ遮蔽要素を、透明で光のとおり、つまり中が透けて見えるガラス・ケース（擬似直接性）へと極小化する第3の道、折衷形態であるならば、今なお十分に可能ではあったからである。つまり、パークリであれば神や自然の意図が、ヴォルテールであれば著者の気高い啓蒙の意図が、視線を遮断するガラス・ケースの中いわゆる陳列対象（図11では犬）としておかれ、外から眺め賞翫される。非直接性を擬似的に直接性化するといった、パークリに

図11 ヴォルテール、透明な光のメタファーによる不可触な鑑賞



においてなされていたあの視覚と触覚の折衷形態が、近代的感受性にとって必然の、新しい基本的型として達成されるのである(図11. 犬の図で示されているものが、人々や読者により希求される無限なる主体の神や世界、著者の意図等にあたるかと考えて見ていただきたい)。

①空間的障害・距離すなわち非直接性を保持しつつも、②直接性への近接もまた可能な限りは保証される、という妥協的な折衷がなされることで、ケース(接近を遮蔽する非直接的障害)の中において、という厳しい限定付きではあるものの、最も重要なもの(=直接的に合一すべき対象・神や気高い思想の著者の意図との直接性)を、人は今や間近で賞味することが可能となったのである。視覚と触覚の協働・折衷をきっかけとして、不可知なものをこのように可能な限りで可知化する法が、透明な光の万華鏡的な美的作用連関を示す「印象主義」として招来されたヴォルテールの絶対的隠喩であったのである。

それは、しかし、人は、神・自然との直接的合一という体験を、もはやみずからの身体でリアルに体験するのではなく、しかるべき距離をとって、対象を外から芸術として眺め味わうことを余儀なくされたという事実を峻厳に突きつける、節度と甘受の法でもあった。それを語っている箇所をもう一度引用してみよう。

このような「印象主義」は、世界が思い通りにならないということ、(感受する人間の眼前に)世界の事象は歪みなく呈示されてはいるものの、世界は扱いにくいという事態に正確に対応しているものである。これは世界に対する神の留保の究極の形式であるが、同時に世界の「美的」享受を世に解き放つのである。(同、p.165、stw, S.160、下線、括弧内補足は高橋)

パークリ窮地の折に姿をみせた美的享受を旨とする印象主義とは、つまり世界認識や世界の読解可能性の放棄と、読解の無能性の告白にほかならないのである。対象(神等)への衝迫は、透明なガラス・ケースを介在させてのみなされ、世界とのあるべき合一体験も、美術館での近代的な美的享受へと変容かつ交代する羽目となる。直接的であるべきかつての宗教的体験は、

今やそれを求める主体（人間）からは決定的に乖離して、光だけは通す透明なガラスの彼方に、美しく感動的に封印かつ陳列され、節度ある距離をもって静かに眺められる美的対象へと退縮する。近代のいわゆる芸術 Kunst の誕生である。事実、触覚的な直接性体験から芸術的で視覚的な陳列へと認識上向かうこうした近代における大いなる変化は、多木浩二が『「もの」の詩学：家具、建築、都市のレトリック』（岩波現代文庫、学術153、2006）「第二章 コレクションから展示へ」（pp.81-118）において明快に素描している、美術館やそこに陳列・展示され享受される近代美術の誕生経緯にびたり照応するものでもある。

ところで、パークリとヴォルテールにおいて露見した、世界認識に対するそのような無力性の告白は、実は、それにやや先立つ17世紀末から18世紀初頭に活躍した思想家ライプニッツにおいて、すでに限定的に認められていた傾向ではある。押し殺そうとしても押し殺しえなかった不確定性の氾濫や、差異群の遍在事実をライプニッツは躊躇気味にはあれ認知しようとしている（パークリが論じられる第11章の直前となる『世界の読解可能性』第10章「世界の年代記、あるいは世界の公式」、p.144、stw, S.142）。してみれば、パークリが触覚なるアイテムを携え思想史の舞台に登場した時には、不確定性はすでに、それ自身表に躍りでて認知されるべき一種の飽和点に近づいていたともいえるかもしれない。そして、世界の不可知に直面していたそのようなライプニッツ等による一つの思想的系譜が、デカルトやニュートン等の近代科学や近代形而上学を根本的に解体しようとしていた次世代のパークリによる触覚の衝撃を通過した後、ここ18世紀のヴォルテールにおいて、不確定性の渾沌を容認しつつもそれを毒抜きしてやや安全化した「印象主義」（美的作用連関）という、いかにも近代的な形態をとって噴きあがってきていた、ということができるのである。

ヴォルテールにおいて、真理・真意を直接伝えることはもはや原則的に不可能であり、認識は、対象との合一という直接性からは決定的に乖離してしまっていた。しかし、その洞察の容認は、不確定性という危険なカオスの、文化秩序への乱入をひきおこす。サバイバルすべき生物種としての人間は、その侵入からは極力身をまもらなければならない。そこで、啓蒙の使徒ヴォルテールは、ニュートンやパークリたちと同じように、不確定性のカオスの侵入と対決する自身の無能性を隠すことのできる絶対的隠喩にすがる。明光にきらめく印象主義に染められるならば、神や真意の不可知も認識を阻害するケースへと美しく比喻化され、さらに阻害要素（遮蔽ケース）も透明なガラスとして極小化されてあらわされる。すると、どうだろう、そのガラス・ケースの中に封印されている認識対象も、見られうる対象物（オブジェクト）として可知化されたかのようなうれしい擬似的様相を呈しはじめるではないか。つまりヴォルテールにおいて、透明な光の透過しうるガラス・ケースという、直接性のいわば擬似的バージョンが創りだされていたわけである。不能と諦念によってやや寂しげに彩られているとはいえ、「美的作用連関」という未来の新しい道がここに開発されたのである。

その結果は甚大であった、真理の不可知や認識の不能といった絶望的状况も（-）、問答無用

の絶対的隠喩投入によって、肯定しうる認識や事態へと巧みにすり替えられる。それだけではなかった。美的に陳列される真理の美的な享受として、認識行為がロココ的に美しく定式化されるや、危機的状況（不可知）を肯定的なもの（享受）へと一気に読みかえ、それを積極的に是認しうる実相隠蔽のための近代の新たな方式もまた確立されていったのである。そして、不思議なことに、そのような超克達成の瞬間に遅れをとることなく、危機襲来の隠蔽とその危機の超克法そのものの隠蔽もまた、ほとんどそれと同時的に、おっとり刀で生起してくるのである。

6 空転する書物隠喩——読解の空白化への歩み

さて、これまで第11章に登場する3つの絶対的隠喩を、著作全体の流れやその章内を貫く文脈、すなわち内的論理と絡めて詳しく検証してきたが、その3者いずれにあっても、思想家たちは、ある種の窮地と論理破綻に陥り、立ち往生している。だが、ほかならぬその瞬間にいわゆる魔法の杖として絶対的隠喩が呼びだされ、それが窮地を反転させ肯定的なつながりを誕生させる。もちろん、それら絶対的隠喩は、著者ブルーメンベルクが透視、命名したものであって、各思想家たち本人にそのことへの明確な自覚や、その記憶があったかどうかは疑問としても、不確定性のカオス的実相への恐怖からの反転、窮地（－）から肯定的状況（＋）への劇的反転がなされていたメカニズムは確認できる。

しかし、そこにその思想家当人たちの自覚や記憶に曖昧さや喪失が見いだされうるとすれば、それは、絶対的隠喩による救済を求める思想家たちの切実なる祈りには、同時に、その奈落とその解消法を極力隠蔽しようとする強い瞬発力もまた、秘かに含まれていたからである。隠喩（見解 Ansichten）に支えられていた概念体系（洞察 Einsichten）は、そもそもその隠喩たちがひしめく“根の国”への依存状態を隠す強い傾向をもっているが、それに加えて、体系内に走った亀裂の他律的な修復という忌まわしい事態は何よりも自己自身にこそ隠されねばならない。そして、社会や歴史の表の貌が、そのような隠蔽に依拠した諸思想の輻輳によって成立しているものと考えれば、社会とはそれら幾重もの隠蔽に篤くまた厚く庇護されて、概念体系による意味や論理的秩序の形成や増殖へと一元的にひた走る荘厳な喜劇を演じるものということができるのかもしれない。隠蔽というのは、つまりたまさかに発生した現象というよりも、概念や概念体系には不可欠の、その第2の本質や属性とでもいうべきものであるのかもしれない。

いうまでもなく、18世紀の思想家パークリは、17世紀のガリレオやデカルト、その後のニュートン等によって確立された近代科学的な思考や心身二元論に支えられたいわゆる形而上学の構築を否定し、不確定性と断片性をあらわにすることで神と自己の双方の不能性を意に反して露見させていった驚くべき思想家であり、そこにこそパークリの先見性と、現代にとっての画期的な意義とが存在していた。ブルーメンベルクが、『世界の読解可能性』のまさに中央に、その

V字状の軌道（「V字プロセス」）の転換点となる折り返し地点にこのパークリを配していったのも、そのような思想史上の評価に基づくものと考えられる。

けれども、そのパークリ自身はといえば、親-人間的な世界読解（書物メタファー）の不可能性を一旦はさらけ出してみせながらも（+）、結局のところ、既存の神観念へと観念論的に後退するという自己矛盾と停滞を見せていく（-）。それでも、パークリにおいて画期的なかたちで提示された、世界の不確定的実相の奥義的な認識は、神という歪曲要因を脱色した「印象主義」という世俗的なかたちで、次世代のヴォルテールに受け継がれることになる。その奥義は、多様に隠蔽され抑圧されながらも、しかし、後代の思索者たちにしかと受け継がれ、着実に駆込されていく。

事実、古代や中世における多様な読解可能性の試行やその変遷模様を通時的にたどる『世界の読解可能性』では、美や芸術、叙事詩、(万有)小説、ロマン、断章、断片の集合体としての宇宙・コスモス（アレクサンダー・フォン・フンボルト）等といったように、非-人間性や非-現実性の浮上動勢を多様に変奏させながら、人間の側に大きく引き寄せて考えようとしていた従来の世界像形成（世界の読解）のベクトルを次第に失効・解体させていった西洋近現代の思考の不気味な歩みが、大胆に描きだされている。この『世界の読解可能性』に盛りこまれたそうした“大きな物語”（人間的な意味の側に引き寄せた概念体系の形成と、その可能性の消失という栄枯盛衰のプロセス）に正確に即して、著作全体は、ずばりV字状（∨）に構成され、著作全体の最も重要なターニングポイントとしてその中央に第11章が配置されていた。そのV字軌道に乗りつつ、記述や解説の不可能性、すなわち人間的な世界読解の本質的な無能性の裸出をめざす強い意志が、終極となるマラルメにおける全的な無と空白化をめざして、以後本格的にうねりドライブしてゆくこととなる。

その意味で『世界の読解可能性』という著作は、西洋思想史上に繰りだされた様々な世界読解の企てを展覧しながら、最終的には、人間的な色合いの濃い読解可能性がきれいに空転かつ不能化して、つまるところ不確定性でしかないドゥルーズ的な純粹差異群という空白のみが広がりゆく世界の読解不可能性成就への歩みを、まずは物語ろうとしていたものであった。さらにいえば、それは、人間たちが太古より極力避けようとしてきたあの「現実の絶対主義」という恐怖状況への無防備な回帰を、最終的には図ろうとしているものではないかという推論も、人間的読解の不可能性をこそ志向するそのV字状の構成から論理的に、自動的に導きだされるように思われるのである。

さて、その空白と不能は、第18章のアレクサンダー・フォン・フンボルトと第19章のマラルメにおいて極まることになる。

マラルメはデカルトの「われ思う^{コギト}（ゆえにわれ在り）」を、書くことこそが唯一の揺るぎな

き不動心であるとする自己確信へと変形させた。世界は存在しないが、それは美的主体にとってのチャンスとなる。(なぜなら)美的主体も(同じく、世界という)その非常事態の中に投げだされ置かれているが、(非世界である)美的であることによって、(世界が消失したという)その非常事態からは抜け出すことができるからである。禁欲的という基本的特徴、象牙の塔の「冷静さ」、触れることすらできない容赦なき冷たさは、それ(絶望的な現実世界からの離脱)に由来する。デカルトにおいて絶対的な懐疑と、絶対的な世界確信とのペアが相補的關係であったように、マラルメの美的行為においても、絶対的な空虚と、絶対的なものによる(世界への)偶然の投擲というペアもまた、互いを互いに前提しあう相補的關係にあるわけである。(『世界の読解可能性』、p.340、stw, S.318、下線、括弧内補足は高橋)

ここでは世界は絶対的空虚と化し、偶然のみが隕石か雹^{ひょう}のように降り注ぐ、ないしは賽による偶然のみが世界を支配する。しかし、美に生きる主体(マラルメ)のみは、その空虚な世界の外、人間的暖かみから離脱した冷氣漂う空虚において、『灰燼』(1911)中の鷗外の分身が誇るように、非-人間的な冷厳さのみを不動心の支えとする。だが、世界の消失に伴い、当然のこと書物、世界の読解可能性もまた空白化する。

プラトン主義的な伝統に関係づけて言えば、洞窟の比喩の呪縛を逃れた者が洞窟の深部へと舞い戻るようなものであるが、それは影に幻惑された者たちを救い出すためにではなく、彼自身が影への帰還を希求しているからなのである。それは、純粹思考という課題に、すなわちアイデアの光を手にしうるまでは屈しないと決意した課題に挫折したためである。書物はそのアイデア(+)の対蹠物(-)である。(それゆえ)書物は一つの黙示録(-)でもあり、そこにおいて書物はエルベノンの一族の終焉と滅亡を語って閉じられる。

(…)物語の最後に、書物を照らしていた／蠟燭が消える。書物は閉じられ、予言も、そして歴史ももはや明かされることはなくなる。書物は物語の(線り広げられる場としての)現実 Realität であって、そのため書物が閉じられてしまうと、未来を持たないということが剥き出しの現実と化す。すなわち、物語があったときのみ存在するあらゆる読解性が終焉する。(…)書物が閉じられるや、そのとき初めて現在が、(空白なる虚としての)現在だけが誕生することとなる。それは、今唯一可能な絶対的行為である。終末は、絶対的なものだからである。(同、pp.341-342、stw, S.320、下線、括弧内補足、独語補足、改頁の印／は高橋)

かくして世界は文字通りプラトンの洞窟の比喩と化し、その洞窟内にふさわしく世界には「今、影と静寂だけが残る」(同、p.344、stw, S.322)ことになる。

だが、それはガリレオやデカルトたちが創りあげた人間中心的な、すなわち「人間的な、あまりにも人間的な」近代的読解可能性の瓦解と全的な消滅ではあっても、私たち現代に生きる現生人類にとっての読解可能性が、それによってすべて奪われたというわけではない。アレクサンダー・フォン・フンボルトやマラルメにおいて顕現した空白の全面化は、太古来、生きのびるために、人間によって人間の願望に向けて幾重にも歪曲化された概念体系や生活世界への退路が、今やきれいに断ち切られたという一事を、よしやそれがいかに絶大な一事であるにせよ、意味しているにすぎないともいえるからである。ブルーメンベルクが目すこうした世界という書物の全面的な空白化と読解可能性の消失は、人間を軸としてきた旧来の書物概念（世界の読解可能性）のいわば全的な清算であり（第1段階、cf. 図4のスピノザの二段階企図）、それらが悉く消失した焦土と全き空白の彼方にのみあるやもしれない異界、人間が生物種として生きのびるためのサバイバルにはどうしてもまといつかざるをえない歪曲や偏頗がもはやありえない、それどころかサバイバルすべき生物としての人間が恐怖して回避してきた自然という「現実の絶対主義」にこそむしろ即した新しい異次元の開示、非-人間的な世界光景の初めての顕現、すなわち新規の読解可能性が新生しうるまさはじまりの時でもありえた（第2段階）。偽りの擬似的洞察 Einsichten の清算炎上の後に、あるやもしれない、しかし果てしなく困難な（真の）洞察への、それは期待である。

その非-人間的な空白が事実横溢しはじめ、人の営みの全てがその空白なる無へと収斂していったことを物語る悲惨な第18章（フンボルト）、第19章（マラルメ）に続く新次元の予告として、ブルーメンベルクは、第20章（ショーペンハウアー）にその新奇なる第2段階新生の芽を芽吹かせんと試みる。その上で、20世紀前半に本格的に探求されていったフロイトによる夢解釈（第21章）と、20世紀末から21世紀初頭に切り開かれはじめた DNA 等の遺伝子解析（第22章）とに、それまでの読解とは大きく異なる異次元が予告されていく。つまり、それまでの人間自身の手による歪曲をはるかに超えた内面的、身体的異次元領野が、例えば天や神への畏怖に基づく古代風のイデオロギーとしてでもなく、また人間の大きいなる肯定のために歪められた近代のサバイバル的な科学的知としてでもなく、真理や洞察 Einsichten の名にたがわない文字どおり表現を絶する世界光景として、今、人類の眼前に初めて出現しはじめていたのである。

7 『世界の読解可能性』におけるV字構成と、絶対的隠喩の暗号性

本論の中ですでに幾度も指摘もし、また具体例によって十分に確認もしてきたように、ブルーメンベルクの絶対的隠喩概念はひどく曖昧であり、一貫性に欠け、その投入やそれについての説明も唐突にすぎ、ほとんど駆け込み寺的に駆りだされたのではないかと、といった疑いすら萌す極めて難解なものである。本論考は、そうした絶対的隠喩が『世界の読解可能性』の中で実際にはたしている機能が、ともあれその名に適う妥当性をもつものであることを、表だつては

書かれてはいない著作の内在論理や文脈に即してたつぷりと補足することによって明らかにしようとしているものである。ブルーメンベルクの場合、ふつうの論理軌道で読んでいく限りでは、絶対的隠喩なるものがなぜその文脈の中に現れ、またそれらが実際にどのような働きを行っていたのか、ほとんどわからないといってもよいからである。

他章に比べてそれが詳論されているはずの第11章（パークリ）でさえも、絶対的隠喩についての言及は前触れもなく、まったく唐突に、しかもたったの一行、一瞬なされているだけであって、その擦過後、絶対的隠喩触覚が絶対的隠喩としてふたたび言及されることはない。読者は、例によってここでもやはりほとんど虚をつかれたにも等しい状態にすておかれるのである。

それは、ブルーメンベルクが、絶対的隠喩なるやっかいな新概念について明確な定義をなしえないためなのか、それとも理念ばかりが先行していて具体的な論証では力量不足の醜態をさらしているせいなのか、それとも、やろうとするならばそのようなことは可能ではあるが、明快な説明と一貫性をあえて回避、封印しているためなのか。前者力量不足云々の可能性については、もちろん書法の愛想のなさをも含めて完全には否定しえないものの、隠されているV字状の内在論理の存在や個別章内での意想外の鋭い論理的なつながりをまのあたりにさせられた事実からみて、やはり想定しにくいといわざるをえない。ブルーメンベルクのように炯眼にして厳格きわまる思索家が、隠喩学という自身の思想伽藍を建立するに際して、その最も重要な礎石となる絶対的隠喩なる概念を曖昧なままにして明証しないという事態は非常に考えにくいからでもある。事実、検証してみると、当初の見た目のちぐはぐを大きく裏切り、『世界の読解可能性』において言及されていた絶対的隠喩には、その名にふさわしい妥当性が一応はそなわっていたことが確認される。

それならば、しかし、ブルーメンベルクは、なぜその論理性や内在論理をくつきりと浮き立たせるのではなく、あのようなひどく難解で理解に苦しむ語り方をしていたのだろうか。思想史上の師ともいべきベンヤミンと同様、ブルーメンベルクもまた、逆説的でしかありえない真理のために、明快かつ一貫性のある定義を意図的に回避しているのだろうか。だが、いかにベンヤミンの直系とはいえ、哲学者である著者が、デカルト的な明晰さとは逆の、そのような韜晦を意識的に行うものであろうか。

けれども、明快さに対するこうした意識的な留保は、実は読解可能性とは対極の解答不能性と深く関わるものでもある。世界の根拠への問いかけに対する解答不能性の呈示は、何もブルーメンベルクにのみ特有の事態ではない。そもそもドイツ観念論の創始者カントの『純粹理性批判』第二部第二章は、二律背反や証明不能性あるいは把握不可能な物自体を論じていた（『世界の大思想10カント 純粹理性批判』高峯一愚訳、河出書房新社、1974）。フッサールの同時代人、20世紀前半の思想家ヴィトゲンシュタイン（1889-1951）も、その後期最晩年の手記『確実性の問題』（黒田亘訳、『ウィトゲンシュタイン全集9』、大修館書店、1975）で展開されているユニークな「言語ゲーム」観において、「253 基礎づけられた信念の基礎になっているのは、何もの

によっても基礎づけられない信念である。」(上記邦訳 p.66、Suhrkamp、S.69) や「308 (…)
およそ判断なるものが可能であるためには、ある種の経験命題はまったく疑いを免れていなければならぬ」(p.78、S.81)⁹として、解答不可能性や不可疑性の必然であることを明証しようとしていた。近代思考の起点となったデカルトの同時代人スピノザにしても、神や自明の公理群を前提にして証明思考を組み立てていく(『エチカ(倫理学) 上、下』畠中尚志訳、岩波文庫、2005)。存在の最終根拠は、つまり不可疑なる禁忌として問うことそのものが封印されており、不可疑性という足場があって初めてあの美しい形而上学が存立可能となっていた。

問うことが許されていないとは、しかし、実はその彼方に語り得ない、語るができない恐怖の空白や空虚が横たわっている、ということでもある。その意味で無根拠性、不可疑性による空無(空白)の封印すなわち隠蔽こそが、スピノザの美しい思考体系を支えていたことになる。神の存在証明に異常に執着したはずの中世後期のスコラ学も、つまるところは神が存在することそのものは疑わず、それが自明の前提となって思考の大伽藍が構築されていた(八木雄二『天使はなぜ墮落するのか：中世哲学の興亡』春秋社、2009、pp.170-171、p.279、301、343)。デカルトやカントたちにおいても、不思議なことに神の不可疑性はゆるがない。こうした思考のからくり、根拠への問いかけに対する強い禁忌性の設定と、それによって生じる、根拠の欠落事実(空虚・空白・中空性)の強い隠蔽は、当事者たちがその中空性を意識しさらには容認したかどうかは別として、神というその絶対的支点を19世紀末にニーチェがはっきりと外す以前、特に目新しいことではなかったのである。

竹田青嗣『プラトン入門』(ちくま新書、筑摩書房、1999、pp.44-52)では、この世界は何かといった人類の原初的問いかけとそれを言い換えたハイデッガーたちによる形而上学的問いは、生きのびるための生への不安から発せられているがゆえにそもそも解答不可能であり、また解答される必要すらないとする根本的な原理が提示されている。その解答不能性は、社会学においても姿を変えて現れてくる。社会学者見田宗介は、その明快な『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来——』(岩波新書、2007、pp.28-31)において、現実から離陸・遊離した「欲望のデカルト空間」を現代資本主義の基本原則として剔抉し、それを根拠なき自己準拠的システムとして論じている。根拠なきとは、その起点が不可疑的であるということである。根拠がないがゆえに、それは自己のバーチャル空間内でダイナミックに駆動し増殖していくことができる。このように見ていくと、解答不能性はよくある話でもあるのである。

ならば、カントやヴィトゲンシュタインのように、ブルーメンベルクにおいても、その不可知性や絶対的隠喩の機能の実相をより平明に説明するという道もまた、十分にありえたはずではある。だが、ブルーメンベルクはなぜかその道もとらない。平明どころか、読者を魅惑しつ

9 Ludwig Wittgenstein, Über Gewißheit. Bibliothek Suhrkamp, Bd. 250, hrsg. v. G. E. M. Anscombe und G. H. v. Wright, Suhrkamp Verlag, 1970.

つも本音を韜晦しては混乱させる、ひどく不親切な書法を採用するばかりにみえる。ブルーメンベルクあるいは『世界の読解可能性』において用いられている絶対的隠喩は、その意味からして学術的次元で厳密に用いられるべき概念としては、いささかぎくしゃくしたもののように見えるのである。

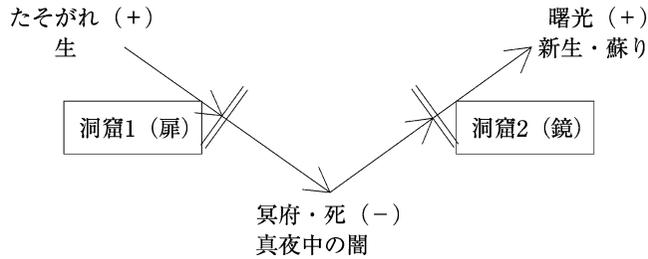
しかしながら、人類ないしは西洋の思考や社会の歴史が、非論理的な隠喩によって形成される見解 *Ansichten* の領域（生活世界）に支えられた、概念体系の通時的な連鎖として鳥瞰される時、論理の非論理的根拠を覆い隠すその不可疑性は、自然、私たちの思考の常態となり、思考のメカニズムを問わんとする時、そこにおいて不可疑性のみを可疑性から隔離して考えるような思索の営みは、もはや不可能となる。むしろそれらが複雑にもつれあっている思考の運動実体を、そのような可疑にして不可疑なるものとして認め、その常態を熟知したうえで解析していくことが必要となる。忘れ去られたベンヤミンの「せむしのこびと」は至るところに潜んでいるからである。ブルーメンベルクの隠喩学が切りこまんとするものも、まさにその複雑に襲をなす可疑性と不可疑性とのからみ方である。だが、その隠蔽の営みがほとんど私たちの日常と化しているとなれば、人の思考運動の軌跡をつぶさにたどらんとする追尾の探照灯もまた、そのすばやくも巧みな（狡猾といってもよい）隠蔽の動きにあわせて、めまぐるしくゆれ動いていくことにならざるをえない。ブルーメンベルクの筆は、隠蔽の襲にあわせてくねりながら、その隠蔽のメカニズムをひとつひとつ剥がしていくのである。

ところが、そうした隠蔽のメカニズムを執拗に暴きながらも、ブルーメンベルクはポストモダンの思想とは異なり、隠蔽行為そのものを素朴に肯定するのでも、また単純に否定するのでもない。ブルーメンベルクは、恐怖のカオスの中に投げこまれた生命種としての現生人類が採ったサバイバル戦略の必然性を冷徹に認め、明快な断定をひかえ、謎めいた絶対的隠喩から明晰なとされる概念体系にいたるまでの、逆三角形に倒立する〈文化〉総体が行う営み全般を総覧し（cf. 図1）、それらを是認する。そして、その上で、それにとどまらぬ圏域へと超えんとする思考のベクトルと重層性もまたそこに含みこもうとする。非論理性から論理性にいたるまでゆるやかに矛盾しながら、しかししなやかに、〈文化〉は人間のために途切れることなくつながっているのである。それらを総覧しうる重層性にブルーメンベルクの魅力と凄みとが存在する。だが、そのことによってブルーメンベルクの筆がよりいっそう複雑さを帯びていったこともまた否めない。

それだけではない、あるいはそれがゆえにというべきであろうか、西洋文化や文学の王道ともいえるべき「表層と深層の二重語り」（高橋）なる奇怪なる仕掛けが、そうしたブルーメンベルクの書法にさらに加算されてくると、その複雑さは尋常ならざるものとなる。

これまで研究者たちは、絶対的隠喩という表現を、ブルーメンベルクのいうがままに素朴にそのままに解してきたが、ブルーメンベルクをそのように単純に受けとめただけでは、人はその見た目の曖昧さと複雑な屈曲に翻弄されて、ただもう混乱するにすぎない。けれども、

図12 V字プロセス図



実はブルーメンベルクにはもうひとつ異なる意図があって、絶対的隠喩にもまた、表の学術的通念とは大きく異なる、ある何か特定の秘密の機能が負荷されているのではないかと解するならば、事態はまったく異なる様相を呈することになる。つまり絶対的隠喩とは、実はブルーメンベルクが隠しつつ発信しようとしている秘密の信号のようなものでもあって、それ自体がすでに特殊な読解可能性を要求するある種の暗号として著者によって構想され、実際にそのようなものとしてきわめて意識的に、まさに周到な計算のもとに投入されていたものなのではないか、という可能性である。

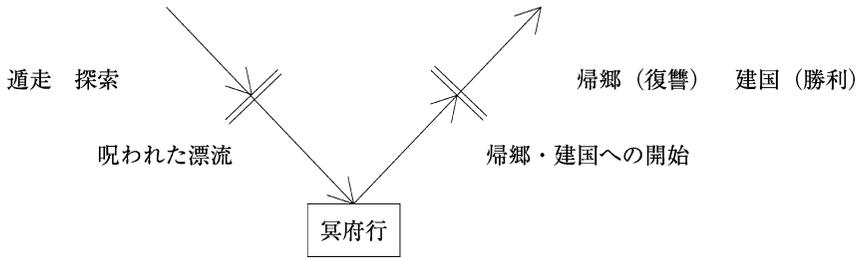
実際に著作全体の構成やその思考のメインテーマを、絶対的隠喩投入の位置を考慮しながら見晴らしてみると、ブルーメンベルクの隠された、しかし気づいてみれば明確な構成意図が読みとれてくる。筆者高橋が1980年代初めから主張している「V字プロセス」軌道がそれである¹⁰。「V字プロセス」という名称は、先に示したように、前半が下降(∨)、後半が上昇(∧)の対称的な軌道を描き、全体は、その下降と上昇のベクトルが扇のように対称的に合わさったV字(∨∧)図形を形成していることに由来している(図12)。

そこにおいて下降(∨)は、昼の光と生命から夜と闇の死の領域への転落を、上昇(∧)は、その闇と死から朝と新生の光への甦りを含意している。光から闇へと落ちていく前半には、死の闇への入り口を示す洞窟1が、また後半にも、死から新生の光への出口となるプラトンの「洞窟の比喩」(『国家』)にも似た洞窟くぐりの儀礼(洞窟2)が、シンメトリーをなすように配置される。トールキンの壮大なファンタジー小説『指輪物語 1～6』(1937-1949。瀬田貞二訳、評論社、1992。映画『ロード・オブ・ザ・リング』2001-2003)の前半に、地下の怪物たちとダイナミックな戦いを繰り広げる洞窟めぐり(洞窟1)が、後半末尾にも、フロドたちと、帰還した王(アラゴルン)や幽霊たちによる洞窟くぐり(洞窟2)が、なぜか対称的に配置されていたのも、実は、小説や映画全体が深まらんと欲する時、人にとっての根源的な物語母型回

10 高橋吉文『西洋文学における冥府行』、『北大時報』第40号、北海道大学、1987、pp.53-56。

高橋吉文『新〈起承転結〉考I』、『メディア・コミュニケーション研究』第55号、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院、北海道大学、2009、pp.39-118。

図13 ホメロスとウェルギリウスにおけるV字プロセス



路（マトリックス）であるその「V字プロセス」に即して、神話的冥府行として構成されざるをえないからである。

その母型回路（冥府行、V字プロセス）にはいくつか守るべき条件や里程標とでもいうべきものがある。例えば、上に挙げた洞窟くぐりがそれである。物語全体が描く冥府行軌道（V字プロセス）の下降・死への入り口と、上昇・新生のための出口とを明確に対称的に設定し、主人公たちにその隧道をくぐらせる。それが冥府行に不可欠の条件として、とりわけ西洋文学や文化では不可避の奥義として継承が要請され、秘かに駅伝されてきた。19世紀末英国の『不思議の国のアリス』の少女アリスが兎の穴から奇怪な異界に転落し、そして穴からふたたび地上世界に帰還するのも、それと同じ論理に基づいてのことである。

この「V字プロセス」に基づく思考法ないしは「物語の母型回路^{マトリックス}」（高橋）は、紀元前8、9世紀頃のホメロスによる『オデュッセイア』や古代ローマ紀元前1世紀のウェルギリウスによる『アエネーイス』のまさに中央・下限点に、冥府行が配置されていたことに典型的に示されているように（図13）、あるいはその衣鉢を継いだ14世紀初頭のダンテの『神曲』と同じように、人は、窮地からよみがえるためには、自分が最も見たくない下限に下り、恐怖の醜悪なメドゥーサの顔（ニーチェ『ディオニュソス的世界観』の世界の実相や、『ツァラトゥストラはこう語った』の永劫回帰）の全貌をつぶさに直視しなければならない。その上で日常的な生へと戻ることが初めて可能となる。「V字プロセス」軌道の中央に扇の要のように冥府行が配置されているのは、「V字プロセス」という巨大な冥府行の、そのまた下限に入れ子的な形をとって集約的に描かれるあからさまな冥府行に赴き、そこでしか遭遇しえない最悪の実相と認識を携え——冥府は、「せむしのこびと」たちも排除されない最大の情報センターなのである——、その闇から地上の光と日常の生へと帰還させるためなのである。

このことは、冥府行と、人類におけるサバイバルの必然性との不可分のつながりを浮かびあがらせる。恐怖である「現実の絶対主義」（自然）の中に無防備なまま投げこまれている人類にとって、生きのびるために絶対に不可欠な条件が2つある。

- 1) 恐怖の実相をしかと凝視すること、そして
- 2) 恐怖の実相は極力見ないで、自身の精神には隠蔽すること

の2つである。冷徹に現実を見ることをないがしろにして甘い夢にのみひきこもるならば、人は現実の襲来に気づかぬまま潰され、食い殺される。つまり生きのびることができない。しかしまた、見る者を石化させるメドゥーサの顔にも等しい戦慄の現実を直視する者は、彼我との圧倒的な力の差に絶望して凝固し、発狂する。つまり、これまたやはり生きのびることができない。人は決して現実を見てはいけないのである。生きのびるに絶対に不可欠な2条件は明らかに矛盾している。けれども、この2条件を同時に満たすことができなければ、人類に未来はありえない。いずれかの極に偏頗するならば、人には破滅だけが待っている。これが、ニーチェが『悲劇の誕生——その音楽の精神から』において直面していたアポリア（難問）である。

それに応えるべく発明された画期的な武器が、『神話づくり』においてブルーメンベルクが唱えた、対象に微妙な距離をとりうる詩であり虚構であり、そしてその具体的なものとしての隠喩であった（『神話づくり』）。隠喩（＝対象との距離）がなければ、人はサバイバルすることができなかったのである。だが、実はそれだけでも十全ではなかった。それら隠喩（虚構）たちは、人々に襲いかかる「現実の絶対主義」（自然）に距離をとり、外の恐怖光景を明視しなくてもすむようにやや透明度を落としたバリア（繭）で自己の精神をすっぽりと包みこみ庇護する神業は見せうるものの、外を見ないがためにその効力は一時的であり、またあまりにも偶然の幸運にたよりすぎている。それは、危険な外部世界を凝視しかつ隠蔽する（見ない）という二律背反の解消と2条件の同時充足にまでは至りえなかったからである。

それに対して、その矛盾した要請の充足を唯一可能とするものが、下降と上昇のシンメトリ構成からなる「V字プロセス」である。下降プロセスにおいて世界のすべてを巡歴して網羅し、人が遭遇しうる最悪の峻厳なる光景や全情報（メドゥーサ）を下限点においてまのあたりにする。物語性豊かなホメロスやウェルギリウスであろうと、また物語そのものを極小にまで消去しそれと反比例するかのようにV字状の冥府めぐりという根源的な構造のみを剥き出しにし、壮麗に極大化してみせたダンテの『神曲』であろうと、最下限への転落的下降と最悪世界（地獄の最底辺、メドゥーサの顔）の直視こそが、それら古典における帰還と甦りへの不可欠の条件となっていた。

V字において下限は上昇への反転の時でもある。非-人間的な恐怖にこそ人間化の新たなはじまりの萌芽を見うる者のみが、地上の日常的な生存、生活世界へ、そして最終的には新たな概念体系へと帰還しうる。非-人間的な恐怖の実相とのそうした遭遇が、その実相をなぜか親-人間的な相貌へと変換させる。非-人間性との合一こそが、「人間的な、あまりにも人間的な」思考体系への帰還とその構築の新たなはじまりとなるのである。ブルーメンベルク（『神話づくり』）では隠喩や虚構として表現されていたものは、初期ニーチェでは、恐怖の渾沌を「浄化す

る鏡』（『ディオニュソス的世界観』）¹¹ や、アポロ神の「仮面」（『悲劇の誕生——音楽の精神からの』）と呼ばれていたが、ニーチェはさらに一歩進めて、「現実の絶対主義」（ディオニュソス神やメドゥーサ）への直視と、そこからの離反や恐怖の解毒、明るい喜びや希望への変換というまさに相反する2要素を、ディオニュソス神（メドゥーサ）とアポロ神（隠蔽）とが妖しげに契合する「アポロ・ディオニュソス渾融」¹²（高橋）によって接続させ、闇にして光である曙へと劇的に反転させ、光の世界を誕生させる。それが“悲劇の誕生”すなわち“曙光”のさし染める蘇りの瞬間なのである。ニーチェは「V字プロセス」によって思考しているのである。

最下限なす「現実の絶対主義」からの反転と、「人間的な、あまりにも人間的な」概念世界へのオデュッセウスの帰還とは、しかし、見方を変えれば、恐怖の実相の隠蔽ということでもある。あるいは、危険な劇薬に満ちた原光景の、解毒化経緯の深まりといいかえてもよい。自然との直接接触を隠蔽し、そこからの離反によってこそ構築されうる〈文化〉という空中庭園に、明るく楽しいロココ風の花を咲き乱れさせる。それが、真夜中の闇（現実の絶対主義）から曙（人間化の開始）を経て、大いなる真昼（人間化の完成）へと歩む「アポロ・ディオニュソスからくり」¹³（高橋）における上昇プロセスである。その反転と上昇時から、多重的に隠蔽が稼働する。つまり、〈文化〉の不可疑的かつ非論理的な起点X（絶対的隠喩）からはじまり、非論理的連想の紆余曲折を経て誕生することになる論理的概念の体系は、その意味でまさに非論理性の隠蔽であることによって存立しえているものであった。

「現実の絶対主義」に威嚇されながら、震えつつもけなげに生きようとしていた人類にとってなくてはならなかった必殺の仕掛け、実相を直視しつつ、その実相を見ない二律背反を自然なるものとしてあらしめる奇跡の装置が、冥府行、「V字プロセス」であった。事実また「V字プロセス」は、人類にとって文字どおり根源的な思考や武器となり、太古の昔から近現代にいたるまで不壊の回路として機能し続け、物語のみならず私たちの思考運動の背後で今もなお隠然たる力をふるい続けている（高橋『新〈起承転結〉考Ⅰ』）。その不壊なる支配は、現代においても同様である。例えば、世界的に人気の高い現代日本の小説家村上春樹の小説群を覗いてみても、その冥府行（V字プロセス）回路の厳然たる駆動は一目瞭然である。

そして、そのマトリックス（母型回路）の呪縛は、現代の思想家ブルーメンベルクにもまた歴然である。そのことは、第一に、彼の生涯にわたる思索経路、執筆活動（著作）全体が神話的な「V字プロセス」軌道に則って構成されている驚愕の事実を示される（『隠喩論Ⅳ』）。第二

11 『ニーチェ全集 第一巻(第一期)』白水社、1979、p.225、Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe, Band1, hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montanari, dtv, S.560.

12 高橋吉文『ニーチェのアポロ・ディオニュソスからくり』、『ドイツ文学論集——小栗教授退官記念』、東洋出版、東京、1984、pp.349-382.

高橋吉文『ニーチェのアポロ・ディオニュソスからくり(二)』、『言語文化部紀要』第7号、北海道大学、1985、pp.1-49.

13 ebd.

に、筆者高橋が『隠喩論Ⅳ』で行った『光の形而上学』の解析においてすでに証明されているように(同 pp.66-69)、ブルーメンベルクが著した個々の著作そのものの内的論理もまた、それぞれ独自な変形がなされてはいるものの、「V字プロセス」軌道にあわせて構成されているというさらなる驚愕の事実においても、その母型回路の君臨は顕著に確認されうる。

その母型回路(V字プロセス)は、本論でとりあげた『世界の読解可能性』においてももちろん絶大な力を発揮している。この著作の前半なす下降プロセス(∨)は、近代科学思考における人間中心の概念体系の形成、および非-人間的な不確定性を抑圧する近代的なシステムの形成への歩みを、いわゆる転落行として描きだしていた。後半の上昇(∧)では、翻って人間中心のその概念体系が解体され、非-人間的な純粋差異群が科学的思考システムの牙城を食い破っては嘖きあがり、読解可能性が空転し空白化へと収斂しゆく時、不確定性が全的に解放される、人間にとっては戦慄世界への歩みが描きだされている。人間的な読解可能性の肯定(前半、-)と、人間的な読解可能性の消失(後、+)の対称的構成と、これはいいかえてもよい。

それゆえ、その対称的構成は、不確定性という水流のバルブが初めて開かれた第11章(パークリ)を下限点とする空白に向けてのV字形を描きだしている(図15)。序(「本書について」)に全22章を加えたいわば全23章が、第11章を下降するベクトルが上昇へと反転する扇の要として、左辺には計11章を、右辺にも計11章を配置するきれいなシンメトリー図形を描きだしているのである。

下降する左辺の最初には、序文(「本書について」)、第1章、第2章の計3章をあて、そこに本書の目的、隠喩学定義、書物隠喩という最も基本的なテーマや方法論の提示がなされている。それに暗に照応するものとして、上昇する動きを示す右辺の後半最後の計3章すなわち第20、21、22章に、非-人間的な新しい読解可能性を示唆する萌芽の誕生が布置されている。隠喩学を実践する本書の方法論のフロイトの根拠のはじまり(ショーペンハウアー)と、そのやや本格的な模索(フロイト)、そして本書の最終目的の開示(DNA)という順序で、左辺上方と同様、ここでも重要度のより高い章をより右上方に配置するかたちで示されているのである(図14)。

だが、第2章に続く左辺第3章からは、転落の相が開始する。天のアイデアの重要性を掲げるプラトンの本来、非-人間的なアイデア世界の輝きに対抗して、非-人間的であるはずであったにもかかわらず人間の感性の側に大幅に引き寄せては読解するという意味で、やや非-人間的に天の意味を解していた読解(書物隠喩(+))から、やや人間的な読解(-)の方へと急落

図14 左辺と右辺の各上3章の対称構成



する角度が増し、それが第6章まで続く。

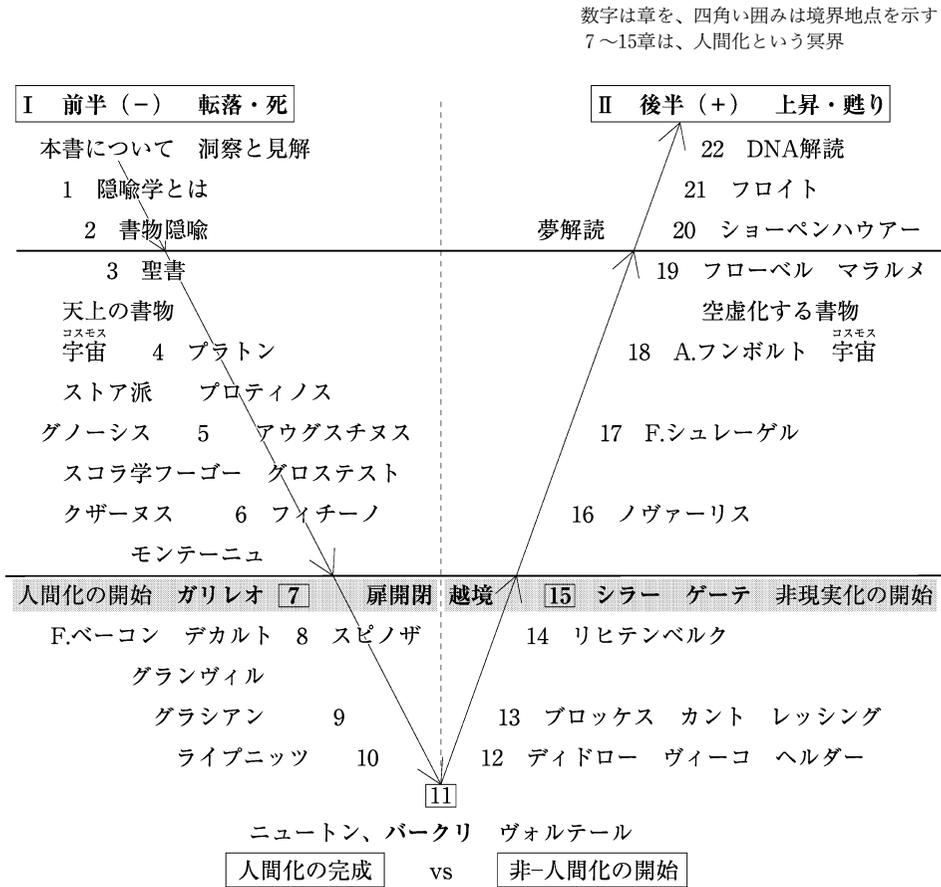
その神秘的なV字シンメトリーは、著作において論じられる内容それ自体をも規定する。例えば、その「V字プロセス」図形において、第7章と第15章はちょうど対をなす位置に配置されているが、第7章のガリレオ論には近代的科学による人間中心的な読解可能性への入り口における下降越境、すなわち扉の開閉として洞窟くぐり（洞窟1）が、象徴的表現に隠されてではあるが盛りこまれている。その「V字プロセス」図のずばり正反対の位置に配置されているシラーとゲーテを論じた第15章でも、鏡や洞窟といったこれまた越境を赤裸々に示す象徴を重要な隠喩として継起的に提示することにより、新生と蘇りの地である異界へと上昇的にくぐりぬける第2の隧道・出口（洞窟2）が描かれていたことについては、すでにくわしく論じたとおりである。ガリレオたちとは逆方向に、人間的な近代科学観（－）からの離脱（＋）がそこに里程標として配置されているのである。シラーとゲーテにおいて刮目されていた鏡や洞窟の隠喩は、つまり、人間中心的な読解の地である冥府領域（－）から、非-人間的読解や認識がなされる蘇りの地（空白（＋））への「空間移動」（プロップ）を示す越境機能を帯びるべく、ブルーメンベルクによって意図的に、そのあるべき座標点に、位置価を発信するマイル・ストーン（標石、標柱）として敷設されていたと考えられるのである。

第7章での越境では、科学を切り開く隠喩（ガリレオ）と、閉じられる隠喩（カンパネラー）の相反する機能が意識的に動員され、韜晦的に表現されている。端的に言えば隠蔽されている。隠蔽されるのは、すでにのべたように、ひとつにはその根源的な隠喩が活性化しはじめる領域そのものが極めて危険なグロテスクなところであり、それを忌避したい人々の目からは極力遠ざける強い必要があったからであるが、逆にまた、「現実の絶対主義」と薄皮一枚で接触している根源的な隠喩群にこめられている神秘的な威力や重いリアリティが、常道的な隠喩理解の圏域（生活世界）の軽さに極力とりこまれないようにするためでもある。その相反する要請を妥当させるべく人類は、「深層と表層による二重語り」（高橋）や二重思考を開発し、その奥義を秘密裏に駆伝してきたのである。

その奥義が、ブルーメンベルクにおいても起動する。「V字プロセス」軌道を歩む著作のこの箇所第7章において、隧道への扉がまずは開き、そしてそれをくぐった後には閉じられる、という順序で、地下冥界（すなわち人間化の強化）への転落が、扉の開閉という隠喩によって暗示的に形象かつ遂行される。隧道をくぐる越境時に、扉なるものが有すべき象徴的機能が、第15章でのシラーとゲーテによる鏡くぐりと同様に、ここでもやはり動きが継起的に配置されることで、闕をくぐる神話的な越境行為が秘かに、したたかに遂行されていたのである。

とはいえ、こうした奇異な書法や、それによるブルーメンベルクの意図の解読には、ずいぶん強い忌避の念が生じるに違いない。けれども、すでにのべたように、「西洋文学の象徴体系」に拠ったこうした屈折した二重書法（可視的次元での明示的語りと論理／不可視の領域での象徴的語りと論理、という二重性）による冥府めぐりこそは、すでに言及した『オデュッセイア』

図15 『世界の読解可能性』 V字プロセス一覧



『アエネーイス』等の古代の大叙事詩にとどまらず、中世初期や中期に記されたケルトの航海記、例えば『英雄メルドゥーンの航海記』や、その系譜を引く中世後期12、13世紀フランスのクレチアン・ド・トロワ、ドイツのハルトマン・フォン・アウエ等による『イーヴェイン』等の騎士物語群、『神曲』の冥府行を世俗的な滑稽譚に取りかえて描き出したボッカチオの『デカメロン』や、それをまたさらにイギリスの説話集へと換骨奪胎しようとした『カンタベリー物語』、あるいは古代の『アエネーイス』や16世紀のイタリアで大変身をとげた騎士物語の大叙事詩群（アリオスト『狂えるオルランド』、タッソー『解放されたイェルサレム』）を強く意識したセルバンテスの『ドン・キホーテ』等、西洋文化・文学のいわば王道をなす傑作群を、まさに傑作たらしめていた当のものである（cf. 北海学園大学人文学部2009年度後期講義「ヨーロッパ文学概論」、高橋吉文「きゃあ〜こわ〜い冥府めぐりが、西洋文学の本流」配布資料①-⑦）。今なお西洋思想を根底から規定する古代ギリシアのプラトンの対話篇群であれ——プラトンの対話編群は、実は、ソクラテスの死による越境を介するアイデアの天界めぐりと、そこからの

帰還というプラスに反転された一種の冥府めぐりとして、極めて文学的に配列されている驚くべきものである——、ダンテの影響を受けた近代ゲーテの『ファウスト』であれ、はたまた現代思想の始祖ともいべき19世紀末のニーチェであれ、あるいはそのニーチェを承けた20世紀のマンやブルースト、ベンヤミンたちであれ、その西洋の奥義を鋭く洞察しえた明治時代の日本の鷗外や漱石であれ、「V字プロセス」と「西洋文学の象徴体系」という決定的な秘密のキイ（鍵）をもたずしては、もはや正当に解することのできないものでさえある。

ブルーメンベルクのこの著作『世界の読解可能性』全体もまた、その王道的なマトリックス（母型回路）を大胆に積極的に組みこんで執筆されている。世界の読解可能性に関係のある思想家たちを通時的にピックアップする方法を一見採用しつつも（可視的な表層の語りと論理）、しかし、そこにおいて論じられる思想家たちの選択はというと、その書物隠喩の必然的な網羅というのでも、といてはかしまた全くの気まぐれから恣意的になされているというわけでもなく、ブルーメンベルクが描いた全体的な青写真である冥府行（V字プロセス）に適合するものとして、その意味でのやや恣意的な配列がなされているのである（不可視の深層の語りと論理）。例えば、第9章に、その時代を代表する思想家といえるのかどうかはなはだ疑問でさえある17世紀スペインのイエズス会修道士バルタザール・グラシアン（『バルタザール・グラシアンの賢人の知恵』齋藤慎子訳、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2006、はその部分訳）がまるまる取りあげられているケース等は、全体図形の対称性やテーマの図式上での対応の必要性（章数の数字あわせ等）等の著者の青写真から採択され、配置された恣意性ないしは底意の典型であるといわざるをえない。

さて、前述したように、そのV字図（冥府行）の転換点に位置するのが、下降と上昇を扇の要のようにつないでいる第11章パークリの章である。そして、この他ならぬ第11章になぜか他章ではほとんど言及されることのなかった絶対的隠喩という表現が三度も言及されるいささか異常なる事態が出現していたことについても、すでに繰り返しふれてきた。だが、この事実の不自然さも、ここ第11章がこの著作構成における最も重要な転換点であることを読者に暗示し、この章の帯びる特別の意味（不確定性すなわち非-人間性の噴出と初めての放流）に刮目させようとする著者ブルーメンベルクの配列戦略に基づくものと考えれば、氷解する。絶対的隠喩という表現そのものの出現それ自体もまた、著者ブルーメンベルクから読者に向けて秘かに発信された特別の、それ自体が実は意味に満ちあふれた暗号であった、と考えることができるのである。

同じように、洞窟からの出口をなす第15章と、新しい次元へのいわゆる「空間移動」となる第20章とに、絶対的隠喩という表現が一度ずつもちいられていた事態も、著作の全体図において、その2つの章の座標の位置が帯びていた構成的意味や位置価と正確に照応してのものである、と考えることができる。つまり、『世界の読解可能性』という著作において、絶対的隠喩という特別の表現が投入されていた箇所は、それが絶対的隠喩であったから絶対的隠喩と記され

ていたそれだけではなく、「V字プロセス」という全体軌道においてその章が帯びるべき冥府行的・象徴的位置価、いわば座標的な位置値を読者に秘かにかつはつきりと知らせるためにこそ、ブルーメンベルクによって意識的に偏在的に布置されていた、と見るべきなのである。絶対的隠喩と呼ばれてしかるべき他の章での多くのケースにおいてそれらが絶対的隠喩とは呼称されずに、なぜかたんに隠喩、レトリック、メタファー態とのみ記されていた所以もまた、ずばりそこにある。

しかし、それならば、同じように「V字プロセス」軌道での切れ目となる前半の第2章と第7章にも、絶対的隠喩表現が投入されてしかるべき、といえなくもない。事実、その可能性も十分にありえたとも思われるが、人間的な読解可能性とは異なる異次元に衝迫しようとしていたブルーメンベルクとしては、その否定されるべき闇世界（すなわち近代科学理念）にはなく、その近代の人間的な読解可能性をこそ消去する新展開の章にのみ、闇の中にかすかに灯された未来への光として、絶対的隠喩なる表現を投入しようとしたに違いない。著者ブルーメンベルク自身にとって特別の、肯定的で救済的な機能（未来の洞察 Einsichten への光）が、絶対的隠喩という表現そのものに賦与された時、絶対的隠喩なるターム（専門用語）は、前半の闇領域ではその言及を回避することにされたのであろう、と推論されるのである。

ブルーメンベルクの『世界の読解可能性』は、世界という書物の解読すなわち書物隠喩（書物メタファー）の西洋思想における系譜を、古代ギリシアから現代までたどったものである。読むということは、人間が投げこまれている世界に意味群の伏在を想定し、それをネットワークのように結んで解読し、宇宙の中に投げこまれた自己存在を是認しようとする行為であり、その営みおよびその営みを可能ならしめる書物隠喩は、端的に、潜在する意味テキストの発掘と意味賦与といいかえてもよいものである。その意味賦与は、そもそも人間が生きのびるために、「現実の絶対主義」（＝自然）を対象化する距離や歪曲として、恐怖に対する詩 Poesie や虚構 Fiktion として始まったとすると（『神話づくり』）、意味賦与は不可避的に人間的な歪曲を帯びたそれとして現れる。その歪曲やずらしの「人間的な、あまりにも人間的な」メカニズムを容赦なく暴き出していったのがニーチェであることはいうまでもないが、しかし、そのような「人間的な、あまりにも人間的な」ものへと歪曲された世界認識や意味賦与を超えた、すなわち非-人間的な認識や意味、ブルーメンベルクがあるやも知れぬと考えた真正の「洞察 Einsichten」がはたして本当にありうるものなのか、それは目下のところほとんど絶望的でさえあるとしても——例えば思想家ロラン・バルトは、その歪曲を視線ととらえ、その呪縛から可能なかぎり離脱しようとした——、ブルーメンベルクは、人間的歪曲から離脱・離陸しうる稀なる瞬間や新しい非-人間的な意味への期待もまた、探求の射程からははずさない。

ブルーメンベルクの読解行為史すなわち書物隠喩史の俯瞰であり鳥瞰的考察である『世界の読解可能性』もまた、読解可能性を探究する書物として当然のことながら、現行の読解可能性

と、それが尽きた彼方に出現するやもしれぬ異なる読解可能性との双方を睨む驚異的な鳥瞰にもとづいて、その論が構成されている。著者のそのような姿勢を明確に示していると考えられるのが、親-人間的な読解可能性（書物隠喩）の勃興と衰微を著作の主筋とした書物隠喩の盛衰史的視点の採用である。

その人間的読解可能性は、近代に正統性を与えた西洋近代の科学的思考と手をたずさえ興隆し、そして19世紀末から20世紀初頭以降退潮かつ不能化していく。私たちは今その不能化という空白の中に生きているのである。と同時に、ニーチェの系譜学的慧眼を継承したブルーメンベルクの世界読解ビジョンには、その不能化という空白をこそ礎とする未来の新しい読解可能性への探求もまた含まれている。そこにブルーメンベルクの思考や思想の曖昧さ、晦渋さ、そして底知れぬ強靱さがひそんでいる。

とはいえ、その探求に確たる未来があるわけではない。未知の未踏の海域、羅針盤もなくその荒海に乗り出す冒険の航海、暴風に翻弄され難破する船等、ブルーメンベルクが『隠喩学のためのパラダイム』等において挙げた重要な隠喩群には、自身のそうした無謀な企図の歩みを愚弄し威嚇する事態が色濃く、そしてリアルに表現されている。世界の読解可能性を示す書物隠喩もまた、カオスに対峙しようとするそうした根源的な行為に無条件にまといつく際立って重要な隠喩のひとつである。その意味で、書物隠喩（＝世界の読解可能性）は、問答無用に立てられる問いやイメージ、いわゆる絶対的隠喩の範疇には入りうるものではある。世界の読解という意味賦与行為は、それを好む好まないの以前に、すなわちその行為の是非に関する判断以前に、いわばアプリオリ的に浮かび上がってくる濃密なイメージであったからである。

書物隠喩は絶対的隠喩としてある。事実、この『世界の読解可能性』にあっても世界書物隠喩は、絶対的隠喩として挙げられているようにみえる。しかし、一貫しているわけではない。書物とは異なるものが絶対的隠喩とされているからである。つまり、どれを絶対的隠喩とし、どれをそうとしないか、なぜまたそれを絶対的隠喩としようか等の基準について、ブルーメンベルク自身にも、ある種の混乱のようなものがあるようにも見てとれるのである。

それは、ひとつには、『隠喩論Ⅳ』や本論中においてすでに指摘しておいたように、極論するならばいかなるものであっても、必要とあらばいついかなる時であれ絶対的隠喩になりうる一方で、ブルーメンベルクによって絶対的隠喩とされていたかにみえる一定の隠喩群が、厳密に言えば絶対的隠喩というよりは、その絶対的隠喩がカオスの人間的文化領域への乱入を食い止めるX点として発生・命名された直後に、その絶対的隠喩の存在をすら隠蔽するものとして、また絶対的隠喩に庇護されて、次々と湧出してきたと推測される「基底隠喩」Grundmetapherとでもいうべきものの方であったからである（高橋『隠喩論Ⅳ』）。

この基底隠喩という表現は、『神話づくり』で論じられている基底神話 Grundmythos（『神話づくり』、S.19）の例に基いて、筆者高橋が『隠喩論Ⅳ』において命名し直したものである。

基底神話はドイツの思想家ヨーナスの考えに基づくもの、とブルーメンベルク自身が『神話

づくり』の注に記しているが (S.198)、その『神話づくり』第二部第二章「II 基底神話と芸術神話」(S.192ff.)によると、基底神話とは、書物隠喩や時間隠喩等、人間の精神世界の深部をになう見えない基底的な領域において、長い時の風雪に耐えその威力と不壊なる存在とが証明されてきた、結果的に人間にとって根源的な意味をもつこととなった神話群をさす。

だが、ブルーメンベルクにおいて神話と隠喩とはほぼ重なり合うものとしてある。したがって、基底神話があるのであれば、当然のこと基底隠喩もまたなければならない。つまり、神話におけると同様、人類にとって長い時の風雪と使用とに耐え、最も基本的な隠喩として深甚な意味を帯びている際だって重要な隠喩群、それが基底隠喩 Grundmetapher である。時計の隠喩、洞窟の隠喩、海の隠喩、橋を渡る隠喩等、ブルーメンベルクにとって絶対的隠喩ないしはそれに類する隠喩とされていたものは、実際にはほとんどその基底隠喩のカテゴリーに属するものである。

では、その両者の違いは何なのか。それは、絶対的隠喩が、それを欠いてはその思想や世界そのものが崩落する世界の基点・起点 (X点) であるのに対して、基底隠喩の方は、絶対的隠喩のようにカオスの乱入を遮蔽する〈文化〉の基点である必要はないという点にある。それどころか、逆に、絶対的隠喩という存在基点に〈文化〉が無条件にしっかりと庇護された直後に、雨後の筍のように発生して、ユングのあの集会的無意識の宇宙のように、“根の国”的に見通しがひどくききにくい、なくてはならない領域を形づくるものである。絶対的隠喩が、カオスから人間の〈文化〉を庇護する最初で最後の楯として存在のバリアを張るものであったとすると、基底隠喩の方は、最初から〈文化〉のためにのみ、〈文化〉のためにこそある〈文化〉特別仕様の隠喩である。基底隠喩はすでに〈文化〉の中において、しかし、〈文化〉のはじまりを推進し、“根の国”的宇宙を発生させている。それゆえ、絶対的隠喩も基底隠喩も、人間にとって、〈文化〉にとって、きわめて根底的かつ不可欠のものである。ただ、いずれも根本的に重要であるということから、絶対的隠喩と基底隠喩は似たものなることが多く、例えば洞窟隠喩が時に絶対的隠喩に、時にはより自由な基底隠喩になるといったように、両隠喩は往々にして重なりあもする(図16)。それがブルーメンベルクの記述にある種の混乱を引き起こしていると考えられるのである。

そのように考えてみると、ブルーメンベルクがその諸著の思考の表舞台で遂行していたのは、

図16 絶対的隠喩と基底隠喩対照図

絶対的隠喩	カオスとの接点X点であり、カオスを隠蔽し、〈文化〉を起動させる。 原則的には、一定の根源的な隠喩群がその任を担うが、但し、いかなる隠喩でもなることが可能である
基底隠喩	絶対的隠喩に庇護されて、〈文化〉の“根の国”として発生し、巨大な基底隠喩銀河系(ギャラクシー)を形成する。 時の風雪に耐えてその効力が実証されている普遍的な隠喩群である

実はその基底隠喩の探求、つまりは時に絶対的隠喩となり時に基底隠喩ともなる諸例の、通時的な探索と展覧にほかならなかつたといえることができる。絶対的隠喩は原則として目にはよく見えないものであるからである。その意味で絶対的隠喩ではなく、目に見える基底隠喩の方こそが、私たち人類にとっては普遍的なものである。それに対して、世界の現実（カオス）の氾濫を遮断すべき使命を帯びた絶対的隠喩の方は、極論するならばこれといって決まっているわけではなく、現実にはさまざまなものなることが可能でさえあって、そこに普遍的な基準といえるものは原則ありえない。『世界の読解可能性』の主役ともいえるべき書物隠喩にしても、絶対的隠喩というよりは実際には普遍的な働きを見せる基底隠喩といった方がより正確で、事実、第11章パークリの章では、空間や触覚、印象主義の方が絶対的隠喩とされている。書物隠喩といっても、畢竟するに、極めて重要な基底隠喩の中のひとつというにすぎないのである。

だが、姿を見せてはならない、目に見えない絶対的隠喩とは、その本性上ひどく曖昧であり、空間、触覚、印象主義（美的作用連関）等の絶対的隠喩も、たしかにあるかなきかの眼にもとまらぬ瞬時的言及にとどまり、その内実もまた見えにくいものであった。しかしながら、そうした謎めく絶対的隠喩をひとつひとつ具体的に検討していくと、ブルーメンベルクの思索と『世界の読解可能性』からは、その奥に隠されていた神話的なビジョンである「V字プロセス」という母型回路の存在が、予想を大きく超えて浮きあがってくる。この著作全体の構成における「V字プロセス」の潜在は、『隠喩論Ⅳ』において確定、証明したブルーメンベルクの全著作群間に描かれる「V字プロセス」軌道の存在、著作と著作とが結ぶ個人の思索経路において、また個々の著作内において、と神話的な「V字プロセス」軌道が、二重に、いわば入れ子的に敷設されていた事実とも正確に対応するものである。『世界の読解可能性』は、人間の側に引き寄せた読解可能性を、その「V字プロセス」に基づいて、非-人間的な読解可能性へと組み替えようとしているもの、いわゆるあの「再占拠」Umbestzung（再配置）の企てをその秘かなる内在論理として構築されている著作である（『近代の正統性Ⅰ：世俗化と自己主張』叢書・ユニベルシタス606、齊藤義彦訳、法政大学出版局、1998、p.53、56、143）¹⁴。「V字プロセス」は、その再配置が起動しよう周りに敷設されているのである。

ブルーメンベルクは実に難解な思想家である。例えば、ブルーメンベルクについての最も信頼性の高い入門書とされるヴェッツ Wetz のブルーメンベルク論（JUNIUS、2004）にも、『世界の読解可能性』が論じられているが（S.115-131）、贅言をつくしながらも著者ヴェッツは、この作品のそうした隠されたメカニズム（V字プロセス、冥府行）はいうまでもなく、それに基づいた作品の中心主題をなす内在論理（非-人間的洞察への歩み）についても透視することがで

14 Hans Blumenberg, Die Legitimität der Neuzeit, Erneuerte Ausgabe, suhrkamp taschenbuch wissenschaft1268, Suhrkamp Verlag, 1996, S.57, 60, 140.

きず、いわばひどいはずれに終わっている。そうしたはずれ、見当違いは、筆者が触れたどのブルーメンベルク論においても同様である。それは、彼らがブルーメンベルクの韜晦的な文言に、あまりにも素朴に寄り添いすぎ、その屈曲した癖のある表現の奥深くに隠されている西洋的思考の伏流にして本流である「V字プロセス」を、それに重ねて理解していくという二重視覚に想到しえなかったからである。もちろん、それはほとんど想像を絶している。絶対的隠喩を決定的な信号として銅鑼を打ち鳴らすように轟かすなどということを、一体誰が発想するというのだろうか。

しかしながら、それは、西洋文化、西洋文学の傑作群においては実は頻々と駆使されている根源的な書法であり、文学や芸術に対しても造詣の深いブルーメンベルクは、そこに思考一般と自身の行うべき思考のための、切実な原回路を見てとったのである。ブルーメンベルクの思索に近づく手がかりは、「V字プロセス」というこの神話的回路においてのみ開示されうる。思想の冥府めぐりという奇妙かつ刺激的な歷程に想到する時、ブルーメンベルクに関する研究は、初めてより深い次元へと踏みいることを許されるのである。

(2009年11月27日受理、2010年2月25日最終原稿受理)

《Zusammenfassung》

Metapher Teil V: Absolute Metaphern in “der Lesbarkeit der Welt” von Hans Blumenberg

Yoshifumi TAKAHASHI

In der vorliegenden Abhandlung, die sich an meine zwei Aufsätze über die Metaphorologie von Hans Blumenberg anschließt, handelt es sich darum, wie es mit absoluten Metaphern in der “Lesbarkeit der Welt” Blumenbergs in der Wahrheit bewandt sei. Die absolute Metapher stellt bei ihm den ersten oder letzten unlogischen Grund für Begriffssysteme in der europäischen Geschichte dar, die aber auch nicht logisch begründet werden können. In der “Lesbarkeit der Welt”, wo man die Genealogie der Buchmetapher behandelt, verfolgt Blumenberg verborgene Spuren der Buchmetapher bei wichtigen Denkern genealogisch. Aber die Undeutlichkeit des Kriteriums, an dem er Metaphern für absolut erklärt, bringt den Leser in Verlegenheit.

Wenn man aber absolute Metaphern an den konkreten Fällen ausführlich analysiert, wird uns klar, dass Blumenberg insgeheim über die wichtigen Symbole und die Grundmatrix der Menschheit verfügt, die von mir entdeckt und der “V-Figur-Prozeß” genannt wurde, der aus zwei Teilen, Untergang und Aufstieg, besteht.

Die absolute Metapher spielt einerseits eine impotent gewordene Logik im begrifflichen Denken erlösende Rolle, übt andererseits eine entscheidende Funktion aus, in der V-Figur der Buchmetapher wichtige Wendepunkte zu gestalten und den Leser darauf aufmerksam zu machen. Der größte Wendepunkt der “Lesbarkeit der Welt” liegt im 11. Kapitel, in dem George Berkeleys Modell erörtert wird und wo man der absoluten Metapher dreimal begegnet, obwohl sie im ganzen Buch nur fünfmal deutlich erwähnt wird.

Blumenberg schildert in der ersten Hälfte des V-figurierten Prozesses, den die Geschichte der Buchmetapher zeichnet, zuerst den Aufschwung des modernen naturwissenschaftlichen Geistes, der aber bei Blumenberg und der Lesbarkeit dem Sturz in die Hölle und zum Tod entspricht, weil man sich dort nur auf Erkenntnisse zugunsten von Menschen beschränken muss, während es in der zweiten Hälfte um ihre Auferstehung zum Licht und Neuleben geht, welche die Impotenzierung der herkömmlichen menschenorientierten Lesbarkeit mit sich bringt. Die Lesbarkeit der Welt geht schließlich in weißer Unlesbar-

keit auf. Jenseits ihrer weißen Ruinen könnte dann erst eine neue unbekannte Lesbarkeit der Welt vielleicht aufkommen, die sich mit dem nur Schrecken erregenden “Absolutismus der Wirklichkeit” zum erstenmal versöhnen dürfte.

Metaphor, Part V: Absolute Metaphors in Hans Blumenberg’s
“The Readability of the World”